The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代スウェーデン語におけるrd, rl, rn, rs, rtの前の母音の長短について
Author(s)	清水, 育男
Citation	IDUN. 1996, 12, p. 35-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代スウェーデン語における
rd, rl, rn, rs, rt の前の母音の長短について

清水育男

1．序

スウェーデン語の発音を指導するうえで重要な点の1つは，それぞれの単語の母音の長短を明確に習得させることである．一般に強勢（tryck/betoning）のない音節の母音は短いが，強勢のある音節の母音は長短どちらかとなる．しかも，その長短によって意味が異なるので，この区別はきわめて大切になってくる．スウェーデン語の母音全体に調音上の難しさはあるにせよ，幸いなことに我々日本人にとって母音の長短そのものに対してはこれを区別して発音したり，聞き分けたりすることにそう大きな困難はないと言えよう．しかも，第1強勢を持つ音節の母音の長短は文字表記から比較的簡単に見分けることができる．すなわち，第1強勢のある音節の母音が長いか短いかは，当該の母音に後続する子音字の数によって決定される．この説明の仕方は（その際，文字としての子音か音としての子音かを明らかにしないままの解説が数多い）多くの学習書や研究書が踏襲してきた．しかもこれは初級の学習者にきわめて分かりやすい利点がある．ここにその原則を簡潔にまとめたものを，定評のある学習書（Holmes & Serin 1990：9）から引用してみよう．ここでは consonant を子音字と解釈する．

(1) Vowels followed by one consonant are long: gå̱r
(2) Vowels followed by 2（+）consonants are short: gạ̊tt
(3) Vowels NOT followed by a consonant are long: gå̱

この原則はかなりの範囲で有効であるが，合致しない場合もいくつかある．まず第一に，(1) の原則に従わないものとしては maj, rum, vän など母音に後続する子音字が〈j〉,〈m〉,〈n〉のときである（〈 〉で囲まれたアルファベットは文字表記を示す）．しかし，これらの3種の子音字の前では，多少の例外を除けば，その音節の母音は一般に短いので，これは別枠のルールを設ければ比較的簡単に処理できよう．

ところが，子音字連続〈rd〉,〈rl〉,〈rn〉,〈rs〉,〈rt〉の直前にある第1強勢を持つ母音（以後，誤解のおそれのないかぎり，これら子音字連続の直前にある第1強勢を持つ母音をただ単に母音と呼ぶことがある）は，ときに長母音，ときに短母音となり，(2) の原則が部分的にしか適用できない．これらの中で，〈rd〉,〈rl〉,〈rn〉の前の母音は通例，現代の標準スウェーデン語では長母音を示し，一方，〈rs〉の前では通例，短母音を示す．さらにもう1つの〈rt〉の前では，さまざまな要因によって長母音も短母音も出現するとされている．このことからすでにうかがえるように，これら子音字連続〈rd〉,〈rl〉,〈rn〉,〈rs〉,〈rt〉の前の母音の長短はかなり複雑な様相を呈していると言えよう．この指摘は研究書などで簡単にかつ散発的に記載されて

はいるが，詳しい考察は未だなされていない．この子音字環境における現代スウェーデン語の母音の長短について触れた研究は意外と少なく，部分的に述べているのは Elert（1970：53），Malmberg（1971：118），また短いながらも全体像を扱っているのは Loman（1967：25），Molde & Wessén（1971：58-59），Garlén（1988：112）ぐらいではないかと思われる．これを反映してか今日でも学習書のほとんどはこれらの子音字連続の前の母音の長短について触れていない．そのため，これらの子音字連続が引き起こす母音の長短の多様性は学習者を大いに迷わしていると言わざるをえない．本稿ではこの多様性を整理して，学習者の一助となることを願いつつ，少しでも明確で簡単な母音の長短区別の基準の提示を試みてみたい．

なお，発音記号は本稿では菅原・Garlén（1987）と同じものを用いる．また本稿で「実例」と言うときは，スウェーデン語に「現実に存在する語」を意味し，それらの語の意味はすべて§10 にまとめて記載した．

2．そり舌音の実例採録にあたって

2.1．子音字連続〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉とそり舌音

現代スウェーデン語において上述のような子音字連続〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉があれば，それぞれほぼ自動的に両者は融合し，単一の「そり舌音」（supradentaler/retroflexer; 下記の補注参照）[ɖ]，[ɭ]，[ɳ]，[ʂ]，[ʈ] になる．しかし，すべてのスウェーデン語圏でそうなるというわけではない．南部スウェーデンでは口蓋垂ふるえ音 [ʀ] と各子音を用いて [ʀ]+[d]，[ʀ]+[l]，[ʀ]+[n]，[ʀ]+[s]，[ʀ]+[t] となり，「フィンランドのスウェーデン語」（finlandssvenska）では，いわゆる巻き舌の [r] とそれぞれの子音を用いて [r]+[d]，[r]+[l]，[r]+[n]，[r]+[s]，[r]+[t] もしくは巻き舌の [r] とそり舌音を伴う [r]+[ɖ]，[r]+[ɭ]，[r]+[ɳ]，[r]+[ʂ]，[r]+[ʈ] とがある．いずれにせよ [r] とそれに後続する各子音は別々に発音される．その他に，[r] も発音せず，そり舌音にもならずに単に [d]，[l]，[n]，[s]，[t] となる Småland 北部の方言や Stockholm，Göteborg の民衆語（det folkliga språket）もある（Elert 1995：69）．本稿ではこれらの方言は扱わない．ただ，現代標準スウェーデン語でもいくつかの実例は〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉とあっても必ずしも単一のそり舌音にならず，フィンランドのスウェーデン語と同様に2通りに発音される語もある．子音字連続が出発点であるので，たとえ単一のそり舌音にならなくても，これらの実例は本稿の対象として扱うことにする．なお，そり舌音は〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉の子音字連続で表されるので，特に問題のないかぎり，以下これらの子音字連続を単にそり舌音と呼ぶことがある（そり舌音の調音の仕方については，清水（1995：28-29）参照）．

[補注：そり舌音のスウェーデン語の名称は上に挙げたように supradentaler もし

くは retroflexer と2通りあるが，Lindblad (1996：1) はそり舌音が実際に調音されるとき，舌先は多少とも上向きになるが反転することはめったになく，しかも [s] や [t] の調音点よりも，上前歯からさらに後方（歯茎後部）で形成されることから，「反る」の意味を持つ retroflexer の術語よりもむしろ「上部歯音」の意の supradentaler のほうが適切であると指摘している．日本語の術語としては「そり舌音」がすでに定着しているので，本稿ではこれを用いることにする.]

2.2. 合成語とそり舌音の子音字連続

次に，その子音字連続を含む実例そのものを収集するにあたって，以下の点を考慮に入れた．母音の長短の区別というときはその音節に強勢があることが前提であるから，まず，これら子音字連続の直前の母音には§1で述べたように第1強勢があること．そして本稿では単語レベルでの母音の長短を取り上げるため，発話中の語中間に生じるそり舌音は除外する（例：Hur‿står‿det till?〈ご機嫌いかがですか〉)．また合成により生ずるそり舌音（例：hår＋strå → hårstrå)，さらに，そり舌音が単一語に含まれたまま合成語となった語（例：ort＋namn → ortnamn）も除外する．上述の合成語のうち，前者はあくまでも合成によって生じたそり舌音であり，本稿ではまず第一に単一語の母音の長短を対象としているからである（屈折形については§2.4参照)．また後者は合成語形成前の単一語を実例としてすでに収録しており，また単一語に含まれる母音の長短は，前者にも言えることだが，合成語となってもそのまま保持されるからである．（ここで単一語といった場合，合成によらずに，すでに同一の形態素の中にそり舌音の子音字連続を含んでいる語を指し，派生や屈折を通じて二次的にそり舌音の子音字連続が形成される語は次章の§2.3，§2.4で採録対象にするかどうかを論述する)．しかし合成語でも例えば körsbär の前要素 körs- はまったく孤立しており，しかも独立の語としても存在しない，いわゆる “restmorfem” (Liljestrand 1975：14-15) であるが，これが第1強勢を持つ場合は，実例として収録した．ただ合成語でも前要素に属格の -s を含むことによってそり舌音を形成するものは，屈折形（下記§2.4参照）として考え，前要素を採録した．このような s を含む実例は〈r〉で終わる名詞であれば理論的にいくらでも造れるが，実際にそのような前要素を含む合成語が常に実在するとはかぎらない．ここでは屈折形をも取り入れた逆引き辞典（Allén & Sjögreen 1993）に記載されていることを前提とした．

2.3. 派生語とそり舌音の子音字連続

派生語も，合成語と同じことが言える．第1強勢・長母音を持ち，そり舌音を引き起こす接辞として，接頭辞では er-，för-，sär-，ur-（er- を除く3個の接頭辞は主として名詞に付加する）があるが，派生語を形成したときそれぞれの接頭辞の長母

音に何の変更も生じない．

er- ：ersätta

för-：fördel，förlaga，förnamn，försommar，förtur

sär-：särdeles，särling，särställning，särtryck

ur- ：urladdning，ursäkt，urtid

ただ，接頭辞 er- [e:r-] の〈e〉は，音節末に〈r〉があっても開口化（vokalöppning）は通例生じない（[æ:r-] と発音されることも確かにあるが）．しかもこの接頭辞がそり舌音を形成するのは〈s〉の前のみ，つまり上記の ersätta のみで，erlägga や ernå ではそり舌音とはならない．

次に，そり舌音を形成する〈d〉，〈l〉，〈n〉，〈s〉，〈t〉ではじまる接尾辞を検討してみる．

-dom：lärdom，svordom

-lek：storlek，kärlek

-lig：farlig，naturlig

-ligen：storligen，årligen

-lös：hårlös，spårlöst

-ning：varning，firning

-sam：sparsam，tursam

-ska：kassörska，spanjorska

-skap：brorskap，dårskap

これらはその子音結合により，〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉の子音字連続となり，そり舌音を形成するが，音節の境界は各接尾辞の前にあるため，派生語形成前の基体（bas）の持つ母音の長短はそのまま保持される（firning は fira からの派生名詞であって firn とは無関係である）．-ska はその語の音節の切れ目によって接尾辞直前の母音が短母音になることも予想されるが（下記参照），女性を示す機能を担うこの接尾辞では基体の長母音が保持されていることがわかる（例えば kassörska の基体 kassör．ところで，barnmorska の o は短母音であるが，これは後要素 morska が第１強勢ではなく，第２強勢を持つこと，また後要素自体がスウェーデン語の長母音を持つ mor からの派生というよりはむしろ，この合成語全体が本来語と低地ドイツ語との混成による形成とも考えられること（Wessén 1973）に起因するものと思われる）．全体として，リストには挙げなかったが，収集した派生語の中で基体の長母音が派生語形成後に短母音化された実例は１つもなかった．したがって，派生語も原則として収録しなかった．しかし，これも合成語の場合と同様に，派生語形成前の基体がどの語にも関係付けられず実在しえないときは，元来の母音が長母音か短母音か不明なため，実例として収集した（例えば，借入のため派生語形成前の基体 här- が存在しない härlig など）．

以上の理由から，基体がまったく孤立している合成語と派生語は採録することにした．さらに，現在もはや生産的でない（improduktiv）と考えられる接尾辞（-a（動詞形成辞），-ling，-nad，-sel（Thorell 1981：§237，§262））を含む実例も採録した．

一方，-sk(a) 接尾辞派生により形成される子音字連続〈rs〉が同一の音節内に含まれる派生語（話者にとって共時的にはすでに派生語と感じられない語も含む）は3子音字が連続するため当然ながら短母音が予想され，事実すべてそうであるため，これは採録しなかった．

-sk(a): norsk, färsk, torsk, forska

2.4. 基本形・屈折形とそり舌音の子音字連続

〈r〉で終わる語幹や語に，〈d〉，〈l〉，〈n〉，〈s〉，〈t〉で始まる文法的な形態素が結合することによって〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉の子音字連続が生じるとき，つまり屈折形（böjningsform）の場合は，基本形（grundform）の母音が必ずしも屈折形にそのまま引き継がれるとは限らない．というのはスウェーデン語全体として，例えば不定詞 köpa（長母音）に対してその過去形，完了分詞はそれぞれ köpte, köpt で，その発音はともに長母音でも短母音でも容認されている．また，名詞では例えば krig の長母音は属格形 krigs で短母音化するからでもある（その他の例は，清水(1995：§3.2）参照）．さらにこれら屈折語尾は合成語や派生語と違って文法的な形態素として体系的に現れることから，屈折形としての範疇をリストの中に設定した．これにより形成される子音字連続〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉の末尾の各子音について言えば，-d は一部の動詞の過去形・過去分詞の語尾に含まれ，-s は名詞・形容詞・代名詞において属格を，動詞では受動態やデポーネンスなどを示すために用いられる．合成語にも含まれうる属格の -s も屈折形に分類した．-t については形容詞の中性形，同時に副詞としても機能し，また一部の動詞の過去形・完了分詞・過去分詞の語尾にも含まれる．ただ，副詞を造る -t は確かに派生接尾辞とも分類できようが，むしろ形容詞の単数中性形が副詞に転用されたものと通例考えるため（Södergh 1968：170），屈折形の範疇に組み入れた．リストに名詞・形容詞の基本形，動詞の不定詞がすでに採録済みの場合は，前者の例えば複数形や後者の現在形などは特に問題のない限り省略した．屈折形の場合，特に -s 語尾が付加するとき，名詞の属格か動詞の受動態か識別が不明になることがありうるので，そのときには両者の区別を明瞭にするため動詞の屈折形の実例の最初に 動 を添えた．

また，〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉で終わる基本形の直後に屈折や派生によってさらに子音字が後続する実例は，その子音字が基本形の持つ本来の母音を短母音化させる可能性もなくはないが（現実にはないものと思われるが），これは3子音字連続となるため，これらは今回特に取り上げない．それらは，屈折や派生によらずに子音字がそり舌音の子音字連続に後続する例語とともに，各章の末尾にその例語を挙げた．

さらに，実例に単音節語と多音節語があるときはその間にセミコロン（；）を挿入して分けた．単音節語は通例，語アクセント（musikalisk ordaccent/tonaccent）は

アクセントIであり，多音節語はそり舌音がある音節に第1強勢がある実例のみを挙げるので，第1音節に第1強勢があれば通例その実例はアクセントIIであり，それ以外の音節に第1強勢があればアクセントIである．しかし，これに該当しない実例やいくつかの借入語の実例には強勢のある音節頭にアクセントIであれば ˊ を，アクセントIIであれば ˋ を付した．

また，原則として固有名詞は除外してあるが，本文中で必要とあれば挙げることにした．

2.5. 実例収集方法と発音チェック

以上の前提を踏まえて，実例を挙げる．なお，〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉を含む実例を探すにあたって，主として次の3文献を利用した：Allén *et al.* (1981); Allén & Sjögreen (1993); Lyttkens & Wulff (1917).

各実例の発音をチェックするために，主として次の文献を使用した．残念ながら，発音辞典にさえこれらすべての実例に発音が表記されているわけではないので，通例の辞書や語源辞典などに散発的に示されている発音表記も大いに活用した．

Lyttkens & Wulff (1889); Svenska språknämnden (1965); Wessén (1973); Malmström & Györki (1980); Allén (1986); SAOL (1986); 菅原·Garlén (1987); Svenska språknämnden & Svenska Akademien (1988); Allén (1991); Skolverket (1992); Forskningscentralen för de inhemska språken (1994).

なお，記載されていない母音（[ø:]，[ø]）はその実例がないことを意味する（§3，§8.3 参照）．—（ダッシュ）は実例が見つからなかったことを表す．また，[i:]/[ɪ] のように記載する場合はどちらの母音でも発音される可能性のある，いわゆる長・短母音併存型を示す．

3．〈rd〉の前の母音について

一般に音節末の〈r〉の前の第1強勢のある〈ä〉，〈ö〉はそれぞれ [æ(:)]，[œ(:)] となることから，〈r〉を含むそり舌音の子音字連続の前では [ɛ:]，[e]，[ø(:)] は生じない．したがって，そり舌音の実例リスト全体に共通することであるが，これら [ɛ:]，[e]，[ø(:)] を含む実例は存在しない．ただ，同一形態素内の〈er〉が長母音で発音されるとき，[e:] と [æ:] の2つの可能性があるが，herde [ˈhe:ɖe] が [æ:] とならずに [e:] となるのは，語源的な意味でスウェーデン語本来の単語でしかも基本形の範疇ではきわめて少ないものと思われる．

次頁のリスト-1から，〈rd〉の前の母音はほとんどが長母音であることがわかる．しかし，〈i〉，〈u〉，〈a〉のときは実例こそ少ないが，必ずしも長母音とはならない例がある．〈a〉の gard と garde，〈i〉の hird も長短ともにあるが，hird は現代の

リスト－1 ：〈rd〉の前の母音

先行する母音	基本形	屈折形
〈i〉 [iː]/[ɩ]	hird	—
〈e〉 [eː]	herde	—
〈ä〉 [æː]	fjärd, flärd, färd, gärd, härd, svärd, värd, värld[(1)]; färdas, gärda, härda, färde, fjärde, gärde, mjärde, värde, färdig	lärd, närd, tärd; lärde, närde, tärde
〈y〉 [yː]	—	hyrd, styrd; inpyrd, hyrde, pyrde, styrde, yrde
〈ö〉 [œː]	börd, skörd; börda, mörda, skörda, vörda, ˋgördel, ˈlördag	förd, hörd, körd, rörd, snörd, störd; förde, hörde, körde, rörde, snörde, störde
〈u〉 [ʉː]	ˈhurdan	—
〈u〉 [ɵ]	kurd	—
〈u〉 [ʉː]/[ɵ]	abˈsurd	—
〈o〉 [uː]	bord, fjord, hjord, hord, jord, mord, nord, ord; borda, jorda, orda, nordan, tordas	gjord, smord, spord; borde, gjorde, smorde, sporde, torde
〈o〉 [oː]	kord, lord; acˈkord, reˈkord, ˈorden, ˈorder, fordon, korda	—
〈å〉 [oː]	bård, gård, hård, mård, vård; ˈårder, vårda, hårding	—
〈a〉 [ɑː]	bard, yard; karda, varda, basˈtard, bilˈjard, bouleˈvard, dynamiˈtard, geˈpard, haˈsard, koˈkard, leoˈpard, milˈjard	spard; sparde
[ɑː]/[a]	gard; garde	—

注(1)：värld の 文字〈l〉は発音されず，実質上〈rd〉と同じになるので，上のリストに加えた．

スウェーデン語ではほとんど使われることがないために，どちらに定着しているか判断はむずかしい（§7.3 の表-1を参照）．〈u〉については absurd は長短両方の可能性があり，Lyttkens & Wulff（1889）によると，19世紀末では長母音とあるが，今では短母音の傾向が強い（§7.3 の表-1を参照）．kurd は常に短母音である．ところで hurdan の長母音は疑問詞 hur の長母音がそのまま保持されている一種の合成語と解釈すれば，これら〈i〉，〈u〉，〈a〉の場合のみ，短母音もありうると言えよう．これらの実例 kurd，absurd，gard，garde はすべて借入語であり，hird もある意味では借入語（正確には古期ノルド語からの復活語）と言える．これらの語が短母音で発音された場合，〈r〉は発音され，末部の〈d〉は単なる歯音［d］もしくはそり舌音［ḍ］となり，融合した単一のそり舌音にはならない（Svenska språknämnden & Svenska Akademien 1988の各項参照）．以上から，〈rd〉に関して短母音が直前にあるときは，この環境の〈rd〉は2子音字が別々に発音されると言えよう．ちなみに人名からその例を1つ挙げるとスウェーデンに16世紀からある貴族名 De la Gardie は短母音で，〈r〉を発音する（Dansk Sprognævn 1977）．

〈i〉，〈u〉，〈a〉を持つ上述の限られた実例4語を除けば，基本形・屈折形ともに〈rd〉の直前の母音はすべて長母音と言える．別の見方をすれば，長母音は〈rd〉を単一のそり舌音として発音させ，つまり〈r〉の独立の発音を遮り，短母音は2子音字を個別に発音させるとも考えられる．

ちなみに，〈rd〉の後にさらに子音字が続いても長母音はそのまま保持される．

-l: gördla，-n: ordna，-r: fordra，-s: bords

4．〈rn〉の前の母音について

〈rn〉の場合も〈rd〉ときわめてよく似ており（次頁のリスト-2を参照），〈i〉，〈u〉のいくつかの実例を除けば母音はすべて長母音である．〈y〉では長母音でも短母音でも実例がまったくない．短母音で発音される firn，nokturn，また短母音で発音されたときの koturn は，上記の〈rd〉の場合と同様に，〈r〉の［r］は消失せずに発音される（Wessén 1973; Svenska språknämnden & Svenska Akademien 1988）．またこれらのうち nokturn と koturn は借入語であるが，firn は Hellquist（1966）や Wessén（1973）の語源辞典に記載がなく，本来語か借入語か不明である．しかし英語とドイツ語に firn が存在し，しかも類似した意味があり，英語の場合 Morris（1973）によるとドイツ語からの借入語であるとしている．おそらくスウェーデン語の firn も借入語であろう．ちなみに，これら3語の使用分野はその意味からもきわめて限られていると言えよう．以上3語を別にすれば，〈rn〉の前の母音は〈rd〉のときと同じように基本形でも屈折形でも長いと言える．

また，〈rn〉の後にさらに子音が続いても長母音はそのまま保持される．

-s: barnslig，-t: modernt

リスト－2：〈rn〉の前の母音

先行する母音	基　本　形	屈　折　形
〈i〉 [ɩ]	firn	—
〈e〉 [æ:]	tern; ex'tern, in'tern, ka'sern, ka'vern, kon'cern, mo'dern, in'ferno	—
〈ä〉 [æ:]	järn, spjärn, stjärn, värn, tjärn; färna, gärna, hjärna, kärna, spjärna, stjärna, tärna, värna, ärna, tärning	—
〈ö〉 [œ:]	björn, hörn, törn, örn; björna, förna, hörna, skörna, törna, törne	—
〈u〉 [ʉ:]	surna, urna	burna, skurna, svurna
〈u〉 [ɵ]/[ʉ:]	ko'turn	—
〈u〉 [ʏ]	nok'turn(1)	—
〈o〉 [u:]	dorn, forn, horn, korn, torn; norna, torna, orne	klorna, korna, skorna
〈o〉 [o:]	morna	borna, morgnar(2)
〈å〉 [o:]	sårnad	tårna
〈a〉 [ɑ:]	barn, flarn, garn, kvarn, skarn; 'harnesk, klarna, varna	farna

注(1)：nokturn は nocturne とも綴られるが，両語は同じ発音である．いずれにせよ 文字〈u〉と発音は一致していない．

注(2)：morgnar の〈g〉は発音されないため，〈rn〉と同一の発音となるため上記のリスト－2に加えた．

5．〈rl〉の前の母音について

〈l〉で始まる接尾辞（-lig, -ligen, -lös）を含む派生語は多数あるが，§２の前提により除外した．いずれにせよ，〈rl〉を含む基本形の実例は元来数少ないと言えよう．また，単音節語にも多音節語にもその実例が少ない．

リスト-3：〈rl〉の前の母音

先行する母音	基　本　形	屈　折　形
〈i〉[i:]	ˈirländsk	—
〈ä〉[æ:]	kärl; färla, märla, pärla, särla, ärla, härlig, lärling, märling, särling	—
〈y〉[y:]	fyrling	—
〈ö〉[œ:]	skörl; örla, örlig, örlog	—
〈o〉[o:]	porl, sorl; morla, porla, sorla	—
〈a〉[ɑ:][(1)]	jarl; arla, ˈharlekin, varlig	—

注(1)：綴りに〈rl〉を持つ karl があるが，〈l〉が黙音となって［kɑ:r］の発音となり，そり舌音にはならないので上記のリスト-3からは除外した．なお，固有名詞ではあるが男子名の Karl は〈r〉が発音されず，［kɑ:l］となり，これもそり舌音の対象とはならない．

上記の注(1)の karl や Karl の発音は別問題として，〈rl〉には他のそり舌音には見られない特徴がある．それは，いくつかの場合（例えば，前章でみた〈i〉や〈u〉などを含む実例）を除いて通例〈rd〉,〈rn〉,〈rs〉,〈rt〉とあれば，ほぼ自動的にそり舌音になるが，〈rl〉は標準語でも綴り通り［r］+［l］の個別の発音でももちろんよく，またそり舌音［ɭ］で発音せずとも，単に［l］の音だけでも“lägre stil”（この場合，低級な文体という意味ではなく，文脈から「俗語的口語」を指すものと考えられる）では十分許容されるというのである（Noreen 1903：434）．他のそり舌音の場合はこの方式で発音したら，方言色が濃くなるが，〈rl〉に限っては話し言葉のグレードの相違に留まる．これは Noreen の時代に限らず，現在でも同じことが言える．確かに，〈rl〉を［ɭ］ではなく［l］で代用しても意味区別にまず支障を来さない．例えば，jarl を［jɑ:l］と発音してもそれに対応する *jal という語は実在

しないため，混乱は生じない（*印はその語が実在しないことを意味する）．派生語についても同様のことが言える．その例語を下に３つ挙げるが，その他のすべてにも同じことが言える．

例：farlig [fɑ:lig]：*falig，　syrlig [sy:lig]：*sylig，
　　fyrling [fy:liŋ]：*fyling

さらに，kärl は［ɕæ:l］と発音されるが，käl［ɕɛ:l］とは区別される．これは〈r〉が単なる黙字であることを意味しているのではなく，〈r〉が直前の母音を開口化した後に黙字となったことを示している．つまり，[æ:]，[œ:] は〈r〉の前にしか現れず，単なる〈l〉の前ではそれぞれ［ɛ:］，[ø:］となるため，両者は同一音声形とはならない．

sorl［so:l］，sorla［so:la］に対しても，sol，sola が考えられるが，これらの語の発音は［su:l］，[su:la］であって，母音価が異なり，これらが意味の上でも混同することはありえない．porl［po:l］，porla［po:la］に対しても，pol［pu:l］，pola［pu:la］が考えられるが，これらも母音価が異なる．ただ porla のみ［po:la］と発音されたとき，påla と異形同音異義語となる．こうみると「俗語的口語」とはいえ，確かに Noreen の指摘するように［ɭ］とせずに［l］で発音しても現実には問題は生じない．ちなみに Skolverket（1992）の発音表記では，〈rd〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉がそり舌音になるとき，その下に凹型の曲線が引かれているが，こと〈rl〉のみは，たとえ現代標準スウェーデン語でそり舌音［ɭ］とされる個所であっても，ほぼ一貫してそり舌音を示す下線の記述がないことは（ただ，それに関して何の指示もないが），もしかしたらこのような事実に起因しているのではないかとも思われる．

もう一度〈rl〉の前の母音についてまとめておくと，この母音はすべて長い．屈折形の実例はまったくなく，そして，他のそり舌音と比べるとその実例が最も少ないのが大きな特徴である．

〈rl〉の後に子音字が続く実例は§２の前提で除かれるので，まずないものと思われる．

6．〈rs〉/〈rz〉の前の母音について

6.1．〈rs〉の前の母音について

〈rs〉の前の母音は短いと言われているが，これもすべてそうであるかどうかを確認する（下記のリスト-4を参照）．

〈rd〉，〈rn〉，〈rl〉のときと同じように，〈i〉，〈y〉，〈u〉を含む単音節語の実例はやはりきわめて少ない．さらに kurs を除けば，短母音［ɪ］，[ɵ］が含まれる hirs，turs の〈r〉の発音は消失せず，両子音個別に発音されることも共通している（[rs]か［rʂ］かは個人差によるものと思われる）．

リスト-4：〈rs〉の前の母音

先行する母音	基　本　形	屈　折　形
〈i〉 [iː]	—	pirs; ban'kirs, ku'rirs, sa'tirs
[ɩ]	hirs	—
〈e〉 [eː]	—	ers; ba'ners, kaval'jers
〈e〉 [æ]	ters, vers; ad'vers, a'vers, kom'mers, kontro'vers, per'vers, re'vers, tra'vers, uni'versum, diˋverse, 'perser, ˋpersika, ˋpersilja	—
〈ä〉 [æː]	—	pärs; af'färs, kar'riärs, mili'tärs, mil'jonärs, veteri'närs [動]: bärs, lärs, närs, skärs; be'gärs, be'svärs, för'tärs
〈ä〉 [æ]	färs, gärs, härs, märs, pärs, tvärs; tvärsa	—
〈y〉 [yː]	—	fri'syrs, vam'pyrs, även'tyrs [動]: hyrs, styrs
〈y〉 [ʏ]	'styrsel, 'yrsel, syrsa	—
〈ö〉 [œː]	—	örsnibb, direk'törs, fri'sörs, inspek'törs, instruk'törs, kas'sörs, leveran'törs, redak'törs, regis'sörs [動]: förs, görs, hörs, körs, rörs, snörs, spörs, störs
[œ]	börs; 'körsbär, 'körsel, 'hörsel, mörsare	[助]: törs
〈u〉 [ʉː]	—	djurs, tjurs, turs; fi'gurs, arkitek'turs, dikta'turs, konjunk'turs, krea'turs, kul'turs, littera'turs, na'turs, skulp'turs
[ɵ]	kurs, turs; kon'kurs, rem'burs, re'surs, kursa, kursor	—

リスト-4（続き）

先行する母音	基本形	屈折形
〈o〉 [u:]	'torsdag, orsak	brors, hors, jours, kors, mors, skors, rors; ma'jors, span'jors, profes'sors
〈o〉 [ɷ]	brorsa, morsa	—
〈o〉 [o:]	—	de'kors, kon'tors, te'nors[(1)]
[ɔ]	fors, kors, mors, nors, pors; forsa, korsa, korso, torso, i morse	—
〈å〉 [o:]	—	hårs, kårs, lårs, vårs, års;
〈a〉 [ɑ:]	'arsel	ars, bars, dars, fars, kars, pars, svars, tsars; memo'ars [動]: spars, bars, skars
[a]	fars, mars, sars, tars; be'vars, farsa, varse, 'varsel	—
[a]/[ɑ:]	vars	

注(1)：tenor の発音は Skolverket (1992) によると [o:] とあり，[u:] は括弧付きなので，ここでは [o:] に分類した．

〈rs〉の前の母音は一般に短いと言われてきたが，リスト-4から明らかなように，すべてがそうであるとは言えない．このリストから基本形では短母音，屈折形では長母音の傾向がはっきりと認められる．この傾向から逸脱するものとしては，基本形でありながら長母音を持つ多音節語の arsel, torsdag, orsak が挙げられる．arsel は Skolverket (1992) によると長母音とされているが，実際耳にするのは短母音が多いように思える．これはおそらくそのヴァリアントで短母音を持つ arsle からの影響と思われる．ただ，両語ともかなりきつい卑語のためか，ほとんどの辞書では発音記号まで表記していない．そのため，実際に arsel が長母音であると言えるかどうか疑問である．次に torsdag であるが，単一語の特徴であるアクセントＩ（曜日名はすべてアクセントＩ）を持つことを考慮して基本形に位置させたが，この語はあるいは合成語とすべきかもしれない．前要素の tors- の基体は北欧神話に登場する

神名 Tor の属格であることは周知の事実である．とすればこの tors- は屈折形に分類され，全体としては合成語になり，〈rs〉の前の母音が長母音であることは上記の傾向に何ら反することはない．最後に，orsak であるが，これは例外的に長母音であるとすることもできるが，語源的に対応する ursäkt からの類推や分析から，語の境界は or|sak とみることもでき，これを派生語と見なせば，基本形から長母音の例外はなくなる．

屈折形のほぼすべてが長母音であることは，まず〈r〉で終わる名詞に属格の -s を付加しても，〈rs〉の前の母音はそのまま長母音が保持されること，さらに第2・第4グループの動詞語幹が〈r〉で終わるとき，その s-受動態（デポーネンスなども含む）の現在形・過去形も，対応する能動態の母音が長ければ長母音はそのまま保持されることに起因する．これに反するものとして，つまり屈折形で短母音になる実例として助動詞の現在形 törs と長短両方を持つ属格の関係代名詞 vars がある．前者は不定詞 töras が長母音であるにもかかわらず，現在形は短母音となり上述の傾向の明らかな例外と言えよう（-s は後続しないが，形が類似した別の助動詞の現在形 tör は長母音である）．次に vars に長短両方があることは，上述の傾向から判断すると短母音であれば基本形，つまり独立した語，長母音であれば属格の屈折形と解釈できよう．その意味で，この実例はリスト-4 で基本形と屈折形の両方に位置させた．

多少の例外はあるにせよ〈rs〉に関しては範疇別に，基本形では短母音，屈折形では長母音という明瞭な区別を確立することができる．このほか固有名詞であるが，この区別から逸脱するものとして男子名 Lars [lɑːʂ] があることを指摘しておく．

最後に，〈rs〉の後にさらに子音字が続く基本形の例語をいくつか挙げるが，3子音字が続く条件では，母音は短母音である．

-k: färsk, torsk, forska	-l: forsla, varsla
-t: först, borste	-n: varsna

（ただ，varsna については長短両母音の発音がある（Svenska språknämnden 1965; 清水 1995：§3.1.B.(4)⑦参照））．

6.2. 〈rz〉の前の母音について

スウェーデン語の〈z〉は常に無声音 [s] であるため，〈rz〉も〈rs〉と同じ音となり，そり舌音 [ʂ] を形成するので，これも対象に入れる．しかし，〈z〉は元来借入語や固有名詞にしか使われず，しかも〈rz〉の前に第1強勢を持つ普通名詞の実例は見つけることができなかった．知る限り，映画の主人公の名前1例のみで，しかも母音は短い: Tarzan [ˈtaʂːan]〈ターザン〉．なお，〈rz〉とありながら〈rts〉とも綴られ，[ʂ] にはならない例（nerz/nerts）は次の§7.8 で扱うことにする．

7．〈rt〉の前の母音について

7.1．先行研究における〈rt〉の前の母音の分類方法

今まで扱った子音字連続のうち〈rd〉,〈rl〉,〈rn〉の前で長母音，〈rs〉の前では基本形において短母音，屈折形において長母音というように比較的はっきりした境界線を引くことができた．しかし，〈rt〉の前の母音の長短の区分は複雑である．Garlén (1988：112) はこれを次の３つのグループに分類し，３番目のグループの母音の長短は随意的で話者によって異なるとしている：

/長母音＋rt/: kart, fart

/短母音＋rt/: stjärt, svart, mört, fort, bort [副]

/長母音＋rt/ もしくは /短母音＋rt/: port, ort, skjorta

一方，Loman (1967：25) はこのことに関して Lyttkens & Wulff (1885) *Svenska språkets ljudlära och beteckningslära* ならびに Molde & Wessén (1948) *Svensk språklära för danskar* の説を紹介し，彼自身もその説を踏襲しながら，歴史的・方言学的な調査が必要であると述べている．残念ながら手元に前者の著作はないが，Molde & Wessén の同書の第４版 (1971) があり，そこで〈rt〉の前の母音について次のような分類が試みられている (§59.2):

母音 u, y, ä, ö は短い．例: hurtig, myrten, hjärta, mört
（ただし，屈折形は除く: dyrt, värt, fört）

母音 å は長い．例: vårta, tårta

母音 a は単語によって短母音 (svart), 長母音 (art, fart) がある．

同書 (§8, §10) において

母音 o については，同一語に長母音・短母音両方のヴァリアントがあるとする．例: ort, lort, fjorton. ただ，port については短母音であれば，より日常的 (mera vardagligt), 長母音であれば，より改まったとき (mera högtidligt) であるとする．

（母音 o [筆者注記: 母音 /u(:)/ のこと] については，実際にはもう少し多くの例語が挙げられているが，リスト-5に含まれることになるので上の引用では省略した．）

Molde & Wessén の分類は Garlén のそれよりも多少詳しく，母音の音質別に長短の区別を一応示しているが，音質ごとにみても長短まちまちであること，o-母音は繁雑であるから基準を決めかねるとしても，a-母音の長短を区別する判断が示されていないこと，またこの分類によっても合致しない例があり，その説明を欠いていることなど，この分類方法にはまだ不十分な点が残されている．もう少し網羅的・総括的な分類基準が設定できないかどうかを検討してみたい．

リスト-5：〈rt〉の前の母音

先行する母音	基本形	屈折形
〈e〉 [e:]	—	ert
〈e〉 [æ]	a′lert(1), ex′pert, of′fert, hertig	—
〈ä〉 [æ:]	—	kärt, skärt, värt [動]: lärt, närt, tärt; be′gärt
〈ä〉 [æ]	bjärt, smärt, snärt(2), stjärt, tvärt, ärt; hjärta, pärta, smärta, snärta(2), svärta, ärta, barm\härtig	—
〈y〉 [y:]	—	dyrt, yrt [動]: hyrt, pyrt, styrt
[ʏ]	′myrten	—
[œ]	fyrtio(3)	—
〈ö〉 [œ:]	—	mört, skört, [動]: fört, hört, kört, rört, snört, stört
[œ]	flört(4), mört, skört [名](5), stört [副], vört, ört; flörta(4), \körtel, pörte, störta	—
〈u〉 [ʉ:]	lurt	purt, surt
[ɵ]	spurt; hurtig, spurta, \turturduva	—
[ɵ]/[ʉ:]	—	ab′surt
〈o〉 [u:]	—	stort [動]: smort, sport; [助] bort
[ɷ]	forta [動]	—
[ɷ]/[u:]	fort [副], hjort, kort [名], lort, ort, port; fjorton, hjortron, \kjortel, \mortel, skjorta	[動]: gjort

リスト-5（続き）

先行する母音	基本形	屈折形
〈o〉 [oː]	′porter	—
[ɔ]	bort 〔副〕, fort 〔名〕, kort 〔形〕, sort, sport; a′bort, es′kort, ex′port, im′port, rap′port, re′tort, trans′port, a‵orta, borta, forte, korta 〔動〕, porto, sporta	—
〈å〉 [oː]	tårta, vårta, årta	hårt, svårt, vårt
〈a〉 [ɑː]	art, fart, kart, part, smart, snart; ′partisk, arta, karta, artig, arton, ′marter	klart, rart; po′lart 〔動〕: spart
[a]	kvart, svart, vart; kvarta	—
[a]/[ɑː]	hart, start; a′part, starta	—

注(1)：alert の母音を Skolverket (1992) では [e] としているが，Malmström & Györki (1980), SAOL (1987), Forskningscentralen för de inhemska språken (1994) では [æ] とある．[æ] が正しいであろう．

注(2)：snärt(a) の母音を Skolverket (1992) は [e] と表記しているが，これも [æ] の誤りであろう．Lyttkens & Wulff (1889) では [æ] とある．

注(3)：fyrtio は綴りと発音が一致しない．

注(4)：flört(a) はスウェーデン語の発音に一致させた綴り．借入元の英語からの綴りをそのまま受け継いだ flirt(a) もあるが，発音は flört(a) に同じ．

注(5)：skört 〔名〕 の母音を Skolverket (1992) は [œː] と長母音で表記しているが，短母音 [œ] の誤りであろう．Lyttkens & Wulff (1889) と Loman (1967 : 25) は短母音である．形容詞 skör の中性形 skört はもちろん長母音である．

（以後，本稿の "a-母音" という表記方式は 〈a〉 で綴られ，[ɑː] もしくは [a] を表す母音を示すものとする．その他の母音表記も同様に，当該の綴りで発音される長母音・短母音を示すものとする．ただし，o-母音は，〈o〉 と綴られ [uː] もしくは

[ɷ] のみを指すものとし，〈o〉と綴られても [o:] もしくは [ɔ] を表す母音は å-母音に分類する.)

7.2. 〈rt〉の分類

〈rt〉の実例を収集するにあたって，〈rt〉と表記され，その直前の母音に強勢があっても末尾の〈t〉が発音されない語（例えば，konsert [kon'sæ:r], kuvert [kɵ'væ:r] など主として借入語）は収録しなかった．（上記のリスト-5 を参照）

Loman（1967), Molde & Wessén（1971）などにより〈rt〉の前で，同一語において長短両母音の発音があるとされている実例はすべて長・短母音併存に分類した．特に o-母音は同一語において長短ともに現れることから，それらの語の発音はいくつかの辞典などでチェックした（その出典などは §7.3 の表-1 を参照).

7.3. [u:]/[ɷ] 併存型の変遷

まず，〈o〉で表記される [u:]/[ɷ] 母音の長短併存について考えてみる．これは広くは地域的・社会的，狭くは個人によって，あるいは同一話者でも状況によって，同一の語の母音の長短が異なるという特殊性をもっている．単語によって母音の長短が相違する a-母音の多数の実例とは次元が異なるといってよいであろう．したがって，方言学的，社会言語学的，また歴史言語学的などあらゆる側面からの調査が必要となろう．これらの視点に立って考察するのは本稿では不可能であるが，手元にあるいくつかの辞書の発音表記を通して，過去およそ百年前の長母音・短母音の記述，そして1960年代から現在に至るまでの母音の長短の変遷を概観することはできよう．これらの辞書の発音表記はその時代の発音を反映しているものと思われるからである．長・短母音併存型の単語でも，時代とともに少なくともそのいくつかは長母音または短母音どちらかに定着しつつある可能性も考えられるからである．(なお，〈o〉と表記されても [o:], [ɔ] の場合は長母音・短母音の併存は見られない).

長・短母音が併存する実例の収集は Molde & Wessén（1971：§8）ならびに Loman (1967：25）が指摘しているものを中心にして，それにいくつか追加した．以下，使用した辞典類を年代順に挙げ，その略語を左端に記す．

LW＝Lyttkens & Wulff (1889)
Sp＝Svenska språknämnden (1965)
Lm＝Loman (1967：25)
MW＝Molde & Wessén (1971：§8)
Ws＝Wessén (1973)
Cl＝Collinder (1974：185)
MG＝Malmström & Györki (1980)
As＝Allén (1986)
SA＝SAOL (1986)
SG＝菅原・Garlén (1987)
SS＝Svenska språknämnden & Svenska Akademien (1988)
Ab＝Allén (1991)
Sv＝Skolverket (1992)
Fi＝Forskningscentralen för de inhemska språken (1994)

表-1

	LW	Sp	Lm	MW	Ws	Cl	MG	As	SA	SG	SS	Ab	Sv	Fi	評
〈-ort〉															
fjorton	L(K)	L	L/K	L/K	L	–	–	–	–	L	–	–	L	–	L
fort [副]	L(K)	K(L)	L/K	L/K	L/K	L/K	K	K	K(L)	K	K	–	K	K	K
gjort [動]	L(K)	L(K)	L/K	–	–	–	–	–	–	L	–	–	K	–	L/K
hjort	L(K)	L(K)	–	–	L/K	L	–	–	–	–	L/K	K	K	–	L/K?
hjortron	L(K)	L(K)	L/K	L/K	L/K	–	–	–	–	–	–	K	K	–	L/K?
kjortel	L(K)	L	L/K	L/K	L	–	–	–	–	–	–	–	–	–	L?
kort [名]	L(K)	L(K)	L/K	–	L/K	K	K	K	L/K	K	L/K	–	K	–	K
lort	L/K	L(K)	–	L/K	L	K	K	–	L/K	–	–	–	K	–	K
mortel	L(K)	L(K)	L/K	L/K	L/K	K	L/K	L/K	L/K	–	L/K	–	L	–	L/K?
ort	L/K	L(K)	–	L/K	L/K	L	–	–	L(K)	L	–	–	K	K	L/K
port	L(K)	L(K)	L/K	L/K	L/K	K	K	K(L)	L/K	–	L/K	–	K	K	K
skjorta	L(K)	K(L)	L/K	L/K	L/K	K	K(L)	–	–	L/K	–	K	K	L/K	L/K
〈-art〉															
apart	–	–	–	–	K	–	L/K	L(K)	K	–	K	–	L	K	L/K?
hart	K(L)	L(K)	–	–	L	–	–	–	–	–	L	–	K	–	L/K?
start	L	L(K)	–	–	–	L/K	L/K	L/K	L/K	–	L/K	L/K	K	L/K	L/K
starta	L	L(K)	–	–	L	–	–	–	L/K	L/K	–	L/K	K	–	L/K
〈-rd〉															
absurd	L	K(L)	–	–	K	–	L/K	K	K(L)	–	K(L)	–	K	K(L)	K
gard	–	K(L)	–	–	K	–	L/K	L/K	L/K	–	L/K	–	–	L/K	L/K
garde	L(K)	K(L)	–	K	K	–	L/K	K(L)	L/K	–	L/K	–	L	L/K	L/K
hird	–	L(K)	–	–	L	–	–	–	–	–	K	–	–	–	L/K
〈-rn〉															
koturn	L/K	K	–	–	K	–	–	L/K	K	–	–	–	–	–	L/K?
〈-rs〉															
arsel	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	L	–	L
bevars	L/K	–	–	–	–	–	–	–	K	–	–	–	K	–	K
vars	K	–	–	–	–	K	–	–	L/K	L/K	–	–	L(K)	–	L/K

（〈rt〉以外のその他のそり舌音の前の母音については既述の各章を参照）

長母音を L，短母音を K とし，これら辞書類の中の発音記述を L，K を用いて示すが，“L，K”もしくは“L eller K”とあれば長・短母音併存と判断し，L/K と記述する．“L även K”，“L ofta K”，“L stundom K”とあれば長母音が優先するとみなして L(K)，逆であれば K(L) とする．“L sällan K”とあれば L〔K〕とする．長母音あるいは短母音のみであればそれぞれ L，K とし，発音形の記載がなければ －（マイナス）の記号を付した（なお，eller〈または〉，även〈～もまた〉，ofta〈しばしば〉，stundom〈時には〉，sällan〈まれ〉の意味である）．ただ，Fi の発音辞書はフィンランドのスウェーデン語が主体であるが，部分的にスウェーデン本国の標準スウェーデン語の発音形も付加されているのでその個所のみ利用した．これらを基にして表-1（前頁参照）を作成し，右端の「評」（＝評価）には各年代の発音から判断して現在の“流れ”と思われる長母音・短母音の優勢を示してみたが，限られた辞書類から判断したものであるため，当然ながら100%正確に現実を反映しているとは言えないかもしれない．「評」の項に？を付したものは，判断しがたいことを示す．さらに表の後半部には，〈rd〉，〈rn〉，〈rs〉において長・短母音両方を持つ実例も同時に付加した．

7.4. [uː]/[ɷ] 併存型について

〈rt〉の前に [uː]/[ɷ] が併存する実例を上に12語挙げたが，これらを語源を念頭に本来語・借入語に分類してみたが，それぞれ 7 語，5 語と極端な片寄りは見られない．単なる本来語・借入語の区分でこの併存型を説明することはできそうにない．

本来語：fjorton，gjort，hjort，hjortron，kjortel，lort，skjorta

借入語（低地ドイツ語から）：fort，kort，mortel，ort

借入語（ラテン語から）：port

さて，表-1の「評」からも長母音，短母音の混在する状態があらためて確認され，すべての実例が共通して同一の方向に向かっているとは言いがたいが，「評」欄の？を考慮に入れると，“流れ”すなわち発音の趨勢として次のような分類ができるであろう．

短母音に定着しつつある語：fort，kort，lort，port

長母音に定着しつつある語：fjorton

長・短母音併存している語：gjort，ort，skjorta

どちらかというと長母音と思われる語：kjortel

どちらかというと長・短母音併存と思われる語：hjort，hjortron，mortel

この分類から短母音が単音節語に広まりつつある傾向が認められるように思われる．gjort は長短ともにあるが，地域的・社会的な違いはもとより，同一話者においてもおそらくさまざまなコンテクストの中で長母音・短母音両方を使用しているものと思われる．また ort についても，例えば ortnamn というときはほとんど長母音である

が，födelseort などでは短母音で発音されることが多い．これはたまたま合成語の要素の配列においてであるが，その他の要因などでも違いが生じてくるものと思われる．今後はこの併存型の長・短母音の選択には，広い意味での各種のコンテクストの調査も必要となってくるであろう．kjortel は辞書（Allén 1986 など）の記述によると現在ではほとんど使われない単語であることから，スウェーデン人自身も長短どちらが正しいのか確信が持てないのではないかと思われる．この併存型に属す実例の内容をみると，名詞，形容詞，動詞，副詞，数詞と千差万別であり，しかもかなり頻繁に使用されるものも多数あれば，kjortel のようにほとんど用いられないものもある．意味や頻度数が併存型の存在に直接関与しているとみるのもむずかしい．

[u:]/[ɷ] 母音併存型のいくつかは長短どちらかに移行しつつあるものもあるが，そのまま併存型に留まるものもあることから，おそらく将来にわたってもこの多様性は消えないであろう．

7.5. [ʉ:]/[ɵ] 併存型と屈折形における母音の長短

このように長・短母音併存は確かに [u:]/[ɷ] に多く見られるが，このほかに [ʉ:]/[ɵ] や [ɑ:]/[a] にも少数ながらも存在する．[ʉ:]/[ɵ] については absurt のみである．これは形容詞の中性形で屈折形の範疇に属するが，長母音ではなく長・短母音併存型である．これは基本形 absurd の長・短母音併存をそのまま引き継いでいるからに他ならない．しかし，表-1 から分かるように基本形が短母音に固定しつつあることから，absurt も短母音に定着してゆくことが考えられる．しかし，[u:]/[ɷ] 母音併存型を除くと，〈rt〉の場合も前章の〈rs〉の場合と並行して屈折形には，はっきりと長母音の傾向が認められるため，屈折形 absurt は長・短母音併存型にそのまま留まる可能性も否定できない．以上のことより，この absurt と上述の gjort を除けば屈折形はすべて長母音であり，その結果，屈折形では長母音が保持されるという図式がすべてのそり舌音の子音字連続に共通することになる．

7.6. 併存型以外の母音の長短

次に [ɑ:]/[a] 併存型が残るが，これは次の§7.7 で説明することにして，先に併存型以外のすべての母音の長短を考察する．

まず，〈rt〉は全体的に基本形において短母音が優勢であること，〈rs〉の基本形においても母音は短母音であること，〈rs〉の〈s〉[s] も，ここで扱う〈rt〉の〈t〉[t] も，ともに無声音であること，また，〈rt〉で長母音となる語はその多くが借入語であること（下述），同時に〈rt〉において短母音となる語の性質を見ると，そのほとんどがスウェーデン語本来の単語であること，これらを考え合わせると，〈rt〉の場合も少なくともスウェーデン語の本来語は短母音であると仮定しても差し支えな

いように思われる．とすると，次の6語はこの仮定に反する．

lurt, snart, arton, kart, vårta, årta

これらはスウェーデン語本来の語と思われるが，長母音となっている．まず，これらの実例において基本形に長母音が現れる理由があるのかどうかを考えてみたい．

(i) lurt の場合

長母音を持つ lurt は Allén (1986) をはじめとするいくつかの辞書によると無変化の形容詞として記載されており，そのためリスト-5では基本形に分類した．しかし，実際に用いられるときは，まず話し言葉に多く，しかもほとんど常に "något lurt"〈何かうさんくさいこと〉というように形容詞の中性形としてしか用いられない．この語は語源辞典に記載がなく，どのような経過を経て成立したかはっきりとはわからないが，長母音を持つ lura (低地ドイツ語からの借入語) もしくは lort (本来語) と語源的に関連性があり，何らかの形でそれらから派生した形容詞かあるいは過去分詞のいずれかの中性形であろうと思われる．とすれば，この語は歴史的にみれば屈折形に分類でき，長母音の由来は説明できよう．しかし複数の辞書が現在，lurt を独自の見出し語として扱っていることから，本稿でも共時的に〈rt〉が同一の形態素内に含まれると考え，上述のように基本形ととらえることにした．またこの語の起源が借入語か本来語であるかも不明であり，いずれの範疇からみても lurt の長母音は例外的であるとせざるをえない (後述②β参照)．

(ii) snart の場合

snart は現代スウェーデン語ではこのままで独立した副詞であり，辞書にもこれが見出し語として挙げられているため，上述の lurt と同じ理由により上のリストで基本形に分類した．基本形であれば，当然長母音を持つ snart は例外となる．しかし，長母音となる理由を見出すのはさほど困難ではない．snart はこの形であまりにも頻繁に使われるため屈折形とは感じられないかもしれないが，実際にはこれも形容詞 snar の中性形が副詞として用いられたものである．頻度は転用された副詞に及ばないが，現代スウェーデン語でも形容詞 snar は存在する．形容詞 snar も副詞 snart も，ともに比較級・最上級は snarare, snarast となり，snar と snart との関係は決して薄れてはいない．したがって，ここに長母音が生じるのは snart が屈折形を引きずっているものと解釈できよう．

(iii) arton の場合

arton は元来 aderton であって，今日でもフィンランドのスウェーデン語ではこのまま発音されているが，現代標準スウェーデン語ではその短縮形である arton が広く用いられている．したがって，arton に長母音が用いられるのは

元の形 aderton の長母音をそのまま引き継いだものと思われる.

(iv) kart, vårta, årta の場合

3語ともに本来語であるが,前者2語は現在のところ長母音である理由を見出すことができない.最後の årta は Collinder (1974: §843) によると短母音であるとしている.

上述のことより, lurt, snart は通時的には屈折形から基本形へと転換したが,母音の長さについては屈折形の持っていた長母音をそのまま保持していると解釈できよう. arton も通時的な視点からその長母音は説明される.確かに上記の6語はすべて例外扱いとなるが,少なくとも前者3語の場合,基本形でも長母音となりうる背景的な理由は説明可能である.残りの3語 kart, vårta, årta も間違いなくノルド語本来の語であるが,背景的な理由が不明の例外とせざるをえない.しかし, Collinder が正しければ理由不明の例外の数は2語に減る.

以上のことより,上記の例外を除けば次の原則が適用されよう.

① スウェーデン語本来の語は,少数の語を除けば短母音である.

逆に借入語のときは,次のようなことが認めるられるのではないかと思われる.

② 借入語であれば以下の2条件を満たさない場合,長母音となる傾向がある.

α. 多音節語で第1音節に第1強勢が置かれないとき,第1強勢のある母音は短い.

alert, expert, offert, abort, eskort, retort, export, import, rapport, transport, aorta

β. y-, u-, o-母音のときは短母音となる(y-, u-母音はしばしば,他のそり舌音の前でも短母音となる.また o-母音は条件αと一部重なる).

myrten, spurt, spurta, turturduva, porto, sport, sort

②の例としては,とりわけ a-母音を持つ実例の大多数にこの傾向が認められる.

art, fart, part, smart, partisk, arta, karta, artig, marter, porter, tårta

この傾向から逸脱して短母音となる借入語の実例には,次のようなものが見出される.

flört(a), kvart(a)

ところで,条件βの y-, u-母音にその実例が少ないことは他のそり舌音と共通している. fyrtio が綴り通りの発音でないことはすでに述べた. myrten は時代がややさかのぼるがラテン語からの借入語, spurt(a) も英語からの借入語である.こうみると, ⟨rt⟩ の前で y-, u-母音を持つ語はスウェーデン語本来の語には存在せず,借入語でさえもきわめて少ないと言える(上述の lurt 参照).

②はあくまでも“傾向”であって,借入語すべてに当てはまるわけではない.①ほどに②が適用できないのは借入語を出発点としているからであろう.つまり,「原語」(källspråk) でその借入語の元の母音が長ければ,借入語となってもその多くは長母

音となるであろうということは当然ながら予想できる．しかし，原語の母音が長くとも借入先のスウェーデン語で長母音となる保証は一切ない．短母音も同様である．例えば，

原語で短母音（独語: Marter）　→ スウェーデン語では長母音: marter

原語で長母音（イギリス英語: sport）→ スウェーデン語では短母音: sport

（借入語の原語あるいはその方言，時代，当時の発音などを特定するのは容易ではない．原語が低地ドイツ語と推定されるものは，ここでは参考として対応する現代ドイツ語の発音を挙げた．また，英語からスウェーデン語への借入を言う場合，第2次世界大戦前までは，その原語はもっぱらイギリス英語であり，その英語では上述のような音声環境では〈r〉は発音されないのが通例である．ちなみに，借入語に関して原語の母音の長短とスウェーデン語の母音の長短の関係を歴史的な視点を加えたうえで調査する必要があろう．）

つまり，借入前の原語における母音の長さは，借入先の言語の音韻体系の中に入れば当然ながら調整される可能性がある．そのため，借入語に長母音の実例もあれば短母音の実例もあることはむしろ当然である．にもかかわらず，〈rt〉においてスウェーデン語で多くの借入語が長母音となる傾向が認められ，しかも上の2つの条件が多くの借入語に適用されることは十分に留意しておくべきあろう．

以上の原則をまとめると，〈rt〉の基本形の場合，併存型は別にするとスウェーデン語本来の単語は通例短母音であり，借入語は条件付きで長母音の傾向があると言える．

7.7. [ɑ:]/[a] 併存型について

最後に，残る併存型 [ɑ:]/[a] について上述の①，②の原則を基にして考えてみたい．基本形における [ɑ:]/[a] 併存型の実例は apart，hart，start，starta である．これら4語のうち hart を除けば，残りの3語は間違いなく借入語である．②の原則がここに適用されるなら，長母音となるべきであるが，実際には長・短母音が併存している．個々に検討する前に表-1から，[u:]/[ɵ] のときと同様に，現在の傾向を示しておく．

長・短母音が併存している語: start，starta

どちらかというと長・短母音併存と思われる語: apart，hart

（ｉ）start，starta の場合

starta は start からの派生動詞とみてよいであろう．この語は英語から借用された比較的新しい借入語である．母音は原語でも長く，また上述②の原則からも当然ながらスウェーデン語でもその母音は長い．したがって，この語に初めから長・短母音ともに存在したとするよりは，やはり借入当初は長母音のみ，

もしくは長母音が主体であったと考えるほうが自然であろう．ではどのようにして start に短母音が加わったのであろうか．それはおそらく動詞 starta の音節の構造に原因があるものと思われる．つまり，スウェーデン語で語頭が /s+子音/ で始まり，/-rta/ で終わる動詞のすべては短母音であることから（例：störta, snärta, svärta, spurta, sporta), これらの類推が働いて starta にもまた同時にその名詞 start にも短母音が用いられるようになったものと思われる．なお，先の表-1を参照すると，19世紀末の Lyttkens & Wulff (1889) で start の発音表記が長母音しか記載されていないことから，短母音が加わったのはそれより後の時代であることが見て取れる．

(ii) apart の場合

これはフランス語 à part を出発点としてドイツ語・英語経由の借入とされている (Wessén 1973). 上の start と同様に原語の母音は長く，これがそのままスウェーデン語に導入されたと考えれば長母音の存在は説明できよう．しかし apart の場合は上記②の原則に付帯する条件αに合致するため，alert などと同じように apart も第2音節の母音が短くなったものと思われる．おそらくこの語は今後，短母音が主体となってゆくのものと予想される．ちなみに，SAOL (1986) の最新版では短母音のみしか記載されていないことは示唆的である．

(iii) hart の場合

先の表-1からもわかるように，どの辞書も長短併存を採らず，どちらか一方としているが，長母音か短母音かは辞書によって異なり長短を決めがたい．語源辞典 (Hellquist 1966; Wessén 1973) によると，古期スウェーデン語期 (fornsvenska) の形容詞 harþer 〈hård〉の中性形から転用された副詞であるとしている．しかし，元来の形容詞の母音がその後 a > å に変化したため，a-母音を保持したこの副詞は元の形容詞の屈折から孤立して現在に至るとされている．また別の見方として，同様な用法の中世低地ドイツ語の hart からの影響で å-母音ではなく a-母音を保つとも言われている．この語を独立した本来のスウェーデン語の単語ととらえれば，短母音であり，外国語の影響が濃いとすれば，借入語は長母音という上述の傾向に沿うものと言える．いずれにせよ，上述の原則には何ら抵触しない．

ところで a-母音には，上で見たように多くはないが長・短母音併存型の存在が許されている．その一方で，a-母音には単語別に長短が分かれる実例も多数ある．それらの実例の多くは借入語であり，借入時に長・短母音併存型選択の可能性もあったにもかかわらず，なぜその実例がきわめて少ないのかを考えるとき，まだ解決すべき疑問がいくつか残っている．

なお，固有名詞として Mårten (男子名) は長・短母音併存型であり，Martin (男

子名)，Märta（女子名）は短母音であることを付加しておく．これらはすべて借入された名前である．

7.8. 〈rt〉に後続する子音

最後に〈rt〉の直後にさらに子音が続くとき，それが基本形であれば短母音である．下の実例の〈rts〉，〈rtz〉は［ʈʂ］，〈rtn〉は［ʈɳ］の発音となる．なお，(　　) 内の綴りは別の綴り方を示す．

基本形

短母音　例: harts，hurts（=hutch); hertz，nerts（=nerz)

（hertz，nerts ともに発音は［æ］)

基体から派生した語や屈折形であるときは，母音の長さはそのまま保持される．長・短母音併存型もそのまま保持される．

屈折形・派生語

短母音保持　例: kvarts，svartna，bortre

長母音保持　例: partner，farts，hörts [動]，torts [助]

長・短母音併存保持　例: orts

8．全体的なまとめ

8.1. そり舌音と各母音の実例数

これまではそり舌音の前の母音を個別的に検討してきたが，ここでは全体的に展望してみたい．まず，そり舌音が全般的にどの母音価と結び付きやすいのか，あるいはその逆なのかを調べるために，下記の表-2A，表-2B を作成した．数字は上述の各リストに挙げた実例の数である．各リストにはそり舌音の子音字連続を含む実例をすべて採録したつもりであるが，見逃した単語が多少あるかもしれない．したがって，数値に多少の誤差があろうことは承知しているが，全体像自体はそう大きく変わることはないものと確信している．

さて，母音価別にまとめるにあたって当然のことながら，例えば〈y〉で［œ］の発音となる fyrtio などは〈ö〉［œ］の項目に分類してある．同様にスウェーデン語では〈o〉の表記でありながら，〈å〉の発音と同じになる実例も〈o〉/〈å〉の［oː]，[ɔ］に分類した．また vars のように基本形とも屈折形とも解釈できる実例は基・屈それぞれの項目に+1と記載した．

表の中にはごく少数ではあるが，〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉が必ずしも単一のそり舌音にならない語も含んでいる．例えば，hird は［r]+[d]/[r]+[ɖ］ともにあるが，後者の発音のように単一のそり舌音とはならないにせよ，そり舌音を含む可能性があるので表に含めることにした．

表-2A

文　字	発　音	rd			rn			rl			小計	合計
		基	屈	計	基	屈	計	基	屈	計		
〈i〉	[i:]	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	3
	[ι]	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	
	[i:]/[ι]	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
〈e〉	[e:]	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1
	[e]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
〈e〉/〈ä〉	[æ:]	17	6	23	23	0	23	10	0	10	56	56
	[æ]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
〈y〉	[y:]	0	7	7	0	0	0	1	0	1	8	9
	[ʏ]	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	
〈ö〉	[œ:]	8	12	20	10	0	10	4	0	4	34	34
	[œ]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
〈u〉	[ʉ:]	1	0	1	2	3	5	0	0	0	6	9
	[ɵ]	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
	[ʉ:]/[ɵ]	1	0	1	1	0	1	0	0	0	2	
〈o〉	[u:]	13	8	21	8	3	11	0	0	0	32	32
	[ɷ]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	[u:]/[ɷ]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
〈o〉/〈å〉	[o:]	16	0	16	2	3	5	5	0	5	26	26
	[ɔ]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
〈a〉	[ɑ:]	13	2	15	8	1	9	4	0	5	28	30
	[a]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	[ɑ:]/[a]	2	0	2	0	0	0	0	0	0	2	
合　計		74	35	109	56	10	66	25	0	25	200	

表-2B

文　字	発　音	rs 基	rs 屈	rs 計	rt 基	rt 屈	rt 計	小計	合計
〈i〉	[i:]	0	4	4	0	0	0	4	5
	[ɩ]	1	0	1	0	0	0	1	
	[i:]/[ɩ]	0	0	0	0	0	0	0	
〈e〉	[e:]	0	3	3	0	1	1	4	4
	[e]	0	0	0	0	0	0	0	
〈e〉/〈ä〉	[æ:]	0	13	13	0	7	7	20	57
	[æ]	20	0	20	17	0	17	37	
〈y〉	[y:]	0	5	5	0	5	5	10	14
	[ʏ]	3	0	3	1	0	1	4	
〈ö〉	[œ:]	0	17	17	0	8	8	25	42
	[œ]	5	1	6	11	0	11	17	
〈u〉	[ʉ:]	0	12	12	1	2	3	15	27
	[ɵ]	7	0	7	4	0	4	11	
	[ʉ:]/[ɵ]	0	0	0	0	1	1	1	
〈o〉	[u:]	2	10	12	0	4	4	16	31
	[ɷ]	2	0	2	1	0	1	3	
	[u:]/[ɷ]	0	0	0	11	1	12	12	
〈o〉/〈å〉	[o:]	0	9	9	4	3	7	16	44
	[ɔ]	10	0	10	18	0	18	28	
〈a〉	[ɑ:]	1	12	13	12	4	17	29	45+1
	[a]	8	0	8	4	0	4	12	
	[ɑ:]/[a]	+1	+1	+1	4	0	4	4+1	
合 計		59+1	86+1	145+1	88	36	124		269+1

単音節語と多音節語，また語アクセントのⅠとⅡについても母音の長短に関しては顕著な特徴は見られなかった．ただ全体的にそり舌音の場合，多音節語のほうが基本形において実例が多いように思われる．また特に i-，y-，u-母音に関してはその多くの実例が短母音であり，少ないながらも全体的に多音節語の範疇にその実例がやや多いと言えよう．全体的に単音節語と多音節語とでは大きな違いが認められなかったため，ここでは単音節語と多音節語の実例数は合計した数値にしてある．

屈折形が〈rl〉ではまったく存在せず，〈rn〉でも過去分詞や複数・既知形を除いてほとんど生じないのは，n- ではじまる文法的形態素が〈r〉で終わる語に接続することが少ないからである（〈rn〉の直前の母音に強勢の置かれない sommarn などは本稿では除外してある）．それに対して〈rd〉，〈rs〉，〈rt〉において屈折形が多いのはすでに§2で述べたように，d-，s-，t- ではじまる文法的形態素が体系的にしかも頻繁に現れるからである．

8.2. 基本形・屈折形における母音の長短

各そり舌音と母音の長短について各章で明らかにしたように，〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉と〈rs〉，〈rt〉との間にはっきりとした境界線が引ける．つまり，前者3種は圧倒的に長母音と結び付き，後者2種は基本形において短母音と結び付くことが多いと述べてきた．そこで上の2つの表を次のようにまとめてみた．総合とは基本形と屈折形を合計したものである．なお，数値は実例数である．

表-3

	基本形			屈折形			総合		
	L	K	L/K	L	K	L/K	L	K	L/K
rd	70	1	4	35	0	0	105	1	4
rn	53	2	1	10	0	0	63	2	1
rl	25	0	0	0	0	0	25	0	0
rs	3	56	+1	85	1	+1	88	57	+1
rt	17	56	15	34	0	2	51	56	17

こうみると，まず基本形において構造的に“長母音＋〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉”であることは間違いないであろう．〈rs〉においては“短母音＋〈rs〉”と判断してよいであろう．〈rt〉についても短母音がかなり多いことに疑いはない．ただ，〈rt〉においては他では見られない特徴として長・短母音併存型が著しく多いことである．

屈折形全体について言えることは，3例（短母音の törs，長・短母音併存の absurt

と gjort）を除けばすべて長母音とみてよいであろう．屈折形の母音の長さは，原則として基本形の母音の長さを保つと言える．

次に，基本形と屈折形を総合した観点から見ると，基本形でも屈折形でも長母音である〈rd〉,〈rl〉,〈rn〉は集計すれば長母音一辺倒になることは当然である．しかし，〈rs〉では基本形においてほぼすべて短母音，〈rt〉も短母音が優勢であるのに対して，屈折形では長母音となり，ともに逆転する．つまり，総合ではすべての屈折形に共通する長母音の特徴も含んでしまうため，〈rs〉,〈rt〉では総合的にみると長母音・短母音の区別が不鮮明になってしまうと言えるであろう．ことに〈rt〉は基本形において長母音と短母音の実例数の差が他のそり舌音の子音字連続の場合ほど極端に大きくなく，屈折形の実例はほぼすべてが長母音のため，総合的には長母音・短母音が互角となってしまっている．〈rd〉,〈rl〉,〈rn〉は基本形でも屈折形でも長母音であり，総合的にも長母音で何の矛盾もきたさないが，〈rs〉,〈rt〉は基本形で短母音，屈折形で長母音という具合に相反する２面性を内部に抱えてしまった．ところが，〈rs〉は§６で確認したように基本形では“短母音＋〈rs〉”という構造が確立されているために，基本形の短母音と屈折形の長母音は明確に区別されている．しかも長・短母音併存型はほとんど見られない．〈rt〉は基本形においても全体として短母音が優勢程度としか言えず，しかも長・短母音併存型が５種のそり舌音の中で一番多く分布し，そのうえ表２-B には現れないが，a-母音は単語によって長母音と短母音に分かれてしまう事象も内包している．これにさらに，屈折形の長母音が加わると，様相は一層複雑化して〈rt〉の母音の長短を一律に決定するのを困難にしている．おそらく多くの学習者はまさにこの“総合的な”視点，つまり基本形と屈折形を混合してとらえてしまう視点に立たされているのではないかと思われる（§９参照）．

〈rt〉が基本形で長母音なのか短母音なのかを明確に識別できないことが，長・短母音併存型を引き起こしたのか，それとも，かねてから存在した長・短母音併存型が基本形の長母音と短母音の区別を妨害しているのかは不明である．確実なことはこの長・短母音併存型が一番多いのは，まさにこの〈rt〉にあるということである．また，すべてのそり舌音のうち，母音の長短の区別の鮮明度が最も低いのも〈rt〉の場合である．

いずれにせよ〈rd〉,〈rl〉,〈rn〉は長母音，〈rs〉,〈rt〉は基本的には短母音であるということは間違いないであろう．なぜ同じそり舌音の中でこのような異なった対応が生じるのかは歴史的にも考察する必要があるが，前者に含まれる d，l，n が有声音，後者の s，t が無声音であることに関連していることは否定できないであろう．

8.3. 各そり舌音と母音価の結び付き

各そり舌音と長母音・短母音の区分が明らかになったところで，問題となるのは各

そり舌音と各母音との結び付きに何か特徴が見られるかを検討してみたい．そこで，上記の表-2A，表-2B から，各母音価の実例を頻度数の高い順に配列してみた．(　　) 内の数字は実例数を示す．

(1) 〈rd〉の場合

基本形：[æ:] (17)，[o:] (16)，[ɑ:] (13)，[u:] (13)，[œ:] (8)，
[a]/[ɑ:] (2)，[ι]/[i:] (1)，[e:] (1)，[ʉ:] (1)，[ɵ] (1)，
[ʉ:]/[ɵ] (1)

屈折形：[œ:] (12)，[u:] (8)，[y:] (7)，[æ:] (6)，[ɑ:] (2)

総　合　：[æ:] (23)，[u:] (21)，[œ:] (20)，[o:] (16)，[ɑ:] (15)，
[ɑ:]/[a] (2)，[i:]/[ι] (1)，[e:] (1)，[ʉ:] (1)，[ɵ] (1)，
[ʉ:]/[ɵ] (1)

以上から，総合的にみると頻度数が高いのは長母音の [æ:]，[u:]，[œ:]，[ɑ:]，[o:]，逆に低い (2 例以下) のは [ɑ:]/[a]，[i:]/[ι]，[e:]，[ʉ:]，[ɵ]，[ʉ:]/[ɵ]である．

(2) 〈rn〉の場合

基本形：[æ:] (23)，[œ:] (10)，[u:] (8)，[ɑ:] (8)
[ʉ:] (2)，[o:] (2)，[ι] (1)，[ʏ] (1)，[ʉ:]/[ɵ] (1)

屈折形：[u:] (3)，[ʉ:] (3)，[o:] (3)，[ɑ:] (1)

総　合　：[æ:] (23)，[u:] (11)，[œ:] (10)，[ɑ:] (9)，[ʉ:] (5)，[o:] (5)，
[ι] (1)，[ʏ] (1)，[ʉ:]/[ɵ] (1)

総合的にみると最も頻度数が高いのは [æ:]，そして [u:]，[ɑ:]，[œ:] が続く．1 例のみは [ι]，[ʏ]，[ʉ:]/[ɵ] である．

(3) 〈rl〉の場合

基本形：[æ:] (10)，[o:] (5)，[ɑ:] (4)，[œ:] (4)，[y:] (1)，[i:] (1)

屈折形：ゼロ

総　合　：基本形に同じ

総合的にみると最も頻度数が高いのは [æ:]，そして [o:]，[ɑ:]，[œ:] が続く．1 例のみは [y:]，[i:] である．

(4) 〈rs〉の場合

基本形：[æ] (20)，[ɔ] (10)，[a] (8)，[ɵ] (7)，[œ] (5)，
[ʏ] (3)，[u:] (2)，[ɷ] (2)，[ι] (1)，[ɑ:] (1)，[ɑ:]/[a] (1)

屈折形：[œ:] (17)，[æ:] (13)，[ɑ:] (12)，[ʉ:] (12)，[u:] (10)，
[o:] (9)，[y:] (5)，[i:] (4)，[e:] (3)，[œ] (1)

総　合　：[æ] (20)，[œ:] (17)，[æ:] (13)，[ɑ:] (12)，[ʉ:] (12)，[u:] (12)，

[ɔ] (10), [o:] (9), [a] (9), [ɵ] (7), [œ] (6), [y:] (5),
[i:] (4), [e:] (3), [ʏ] (3), [ɷ] (2), [ɩ] (1), [ɑ:]/[a] (1)

総合的にみると最も頻度数が高いのは [æ], そして [œ:], [ɑ:], [æ:] と数値的に途切れなく続き，3例以下は [e:], [ʏ], [ɷ], [ɩ], [ɑ:]/[a] である．

(5) ⟨rt⟩ の場合

基本形：[ɔ] (18), [æ] (17), [ɑ:] (12), [œ] (11), [u:]/[ɷ] (11), [o:] (4),
[a] (4), [ɵ] (4), [ɑ:]/[a] (3+1), [ʏ] (1), [ʉ:] (1), [ɷ] (1)

屈折形：[œ:] (8), [æ:] (7), [y:] (5), [u:] (4), [ɑ:] (4), [o:] (3),
[e:] (1), [ʉ:] (2), [ʉ:]/[ɵ] (1), [u:]/[ɷ] (1)

総　合：[ɔ:] (18), [æ] (17), [ɑ:] (16), [u:]/[ɷ] (12), [œ] (11), [œ:] (8),
[æ:] (7), [o:] (7), [y:] (5), [u:] (4), [ɵ] (4), [a] (4),
[ɑ:]/[a] (3+1), [ʉ:] (3), [e:] (1), [ʏ] (1), [ɷ] (1), [u:]/[ɷ] (1)

総合的に頻度数が高いのは [ɔ], [æ], [ɑ:] であり，その後これも数値的に途切れなく続き，1例のみは [e:], [ʏ], [ɷ], [u:]/[ɷ] である．

以上の結果をみると長母音をとる傾向の強い ⟨rd⟩, ⟨rn⟩, ⟨rl⟩ については，[æ:] が圧倒的に多い．それに続く母音としては [œ:], [u:], [ɑ:], [o:] がある．低い頻度の母音は [y:], [ʉ:], 最も少ないのは [i:], [ɩ], [e:] [ʏ], [ɵ] であった．まったく生じない母音は [e], [æ], [œ], [ɷ], [ɔ], [a] であった．

次に短母音をとる傾向の強い ⟨rs⟩, ⟨rt⟩ については，[æ], [ɑ:], [ɔ], [œ:] の母音が多いが，圧倒的とは言えない．[u:]/[ɷ] 併存型もかなり頻度が高い．低い頻度数の母音としては [ɩ], [e:], [ʏ], [ɷ] が挙げられる．

(1) から (5) まで全体を通しては，やはり [æ:], [æ] が頻度上断然多く，次に [ɑ:], [œ:] が続く．少ないのは [i:], [ɩ], [e:], [ʏ], [ɷ] であろう．母音 [ɛ:], [e], [ø(:)] は ⟨r⟩ の前では存在しえないことはすでに述べた（§3参照）．言い換えれば，前舌・後舌の半広口（[ɛ:] は除く）から超広口の母音がそり舌音と最も「相性」が良いといえる．逆に前舌の狭口から半狭口の母音および部分的に中舌の狭口・半狭口の母音はそり舌音ときわめて「相性」が悪いと言える（音韻論上の日本語による術語は間瀬（1995）のものを使用した）．

i-, e-, y-, u-母音は，長母音の傾向を示す ⟨rd⟩, ⟨rl⟩, ⟨rn⟩ においても，短母音の傾向を示す ⟨rs⟩, ⟨rt⟩ においてもきわめて頻度が低い．とりわけ i-, u-母音の直後に ⟨rd⟩, ⟨rn⟩, ⟨rs⟩ が続くと，[r] が消失することなく [r]+‘歯音’ というように個別に発音さる．（その場合 ⟨r⟩ の直後の歯音はそり舌音化することもあることはすでに確認した（例: kurd, hird, firn, hirs).）

i-, u-母音が [r] 消失を阻止するのか，単一音としてのそり舌音化を妨げるのか，

それともそり舌音が i-，u-母音に先行されると自動的に個別に発音されるのかは，決めがたい．i-，u-母音が〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉とともに現れるのは数少ないことは事実である．基本形でも屈折形でも頻度数の低い母音はすべてのそり舌音の子音字連続に共通しているが，逆に基本形でも屈折形でも頻度数の高い母音ですべてのそり舌音の子音字連続に共通しているものは１つもなかった．

スウェーデン語では e-（ここでは短母音のみを指す），ä-，ö-母音は一般的に音節末の〈r〉の前で口の開きが大きくなり，前者の２母音はそれぞれ [æ]，[æ(:)] に，そして後者の ö-母音は [œ(:)] となることは周知の事実である．そり舌音の子音字連続の前でも当然ながら同様の変化を起こす．ただ，そのとき [r] は次の歯音と融合し，そり舌音化する（このとき母音が長母音となる〈rd〉などでは，代償延長がもちろん考えられるが，これは史的枠組みの中で考察したい）．したがって理論的には通例，[e]，[ɛ:] や [ø]，[ø:] は起こりえない．その一方で，[æ]，[æ:]，[œ]，[œ:] とそり舌音との共起の実例は枚挙にいとまがないことから，〈r〉の前におけるこれらの母音の変化は，そり舌音化以前に生じたことは間違いないであろう．

９．終わりに

〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉の前の母音の長短についてほとんどの学習書は解説を欠いている．たとえ説明があっても，ただ単に前者３種は長母音，後者２種は短母音程度の説明である．学習者はそり舌音化する〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉をすべて同一のグループととらえるため，その直前の母音の長短に関して異なった対応をしなくてはならないことに戸惑いを感ずるであろう．事実〈rs〉については先行母音は短母音と説明されても，学習者は屈折形の長母音にも頻繁に遭遇するため，この説明に疑念を抱くであろう．つまり，屈折形とは意識せずに“総合的”にとらえてしまい，無秩序に短母音も長母音もほぼ同程度に生ずるものと理解してしまう危険性がある．〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉の前の母音の長短の区分基準を見出すために，言い換えれば“総合”の危険性を回避するために，ここに基本形と屈折形という分類を導入することによって，これらの子音字連続の前の母音の長短の区分が多少なりとも明らかになったものと思われる．すなわち，そり舌音の前の母音は，屈折形において屈折形態素の歯子音字に影響されることなく，常に長母音であることが判明したことによって，基本形のそり舌音の前の母音の長短も，より一層明確に示すことができる．

次頁の表-4には，そり舌音の子音字連続の前の母音の長短を，基本形・屈折形に分けてその区別を示した．なお，L＝長母音，K＝短母音，L～K は単語によって，また地域・社会・個人によって，さらに同一話者・同一語内において長母音でも短母音でも現れうることを示す．－（マイナス）は存在しないことを表す．

表-4

	rd	rl	rn	rs	rt
基本形	L	L	L	K	L～K
屈折形	L	−	L	L	L

〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉は全体を通して長母音，〈rs〉は基本形と屈折形で長短がきれいに分かれる．そして，〈rt〉も屈折形では長母音であることを確認した．また，派生語は§2の前提により除外したが，長母音を持つ基体が派生語となってもその母音が短母音化される例は，〈d〉，〈l〉，〈n〉，〈s〉，〈t〉で始まってそり舌音を形成する接尾辞においては1例もない．このことから，長母音を示すという点において派生語も屈折形と同じ範疇に入ると考えてよいであろう．ここまでは比較的問題なく結論が引き出せよう．

残るは，〈rt〉の基本形における母音の長短である．先にも紹介したが，Molde & Wessén (1971: §59) は a-母音は単語により長短が異なり，o-母音は長・短母音併存とし，この2種の母音の長短についてはその区別を学習者の判断に委ねてしまっている．本稿ではその委ねられた部分を§7で中心的に検討してきた．

o-母音の実例は確かにそのほとんどが長・短母音併存型であるが，それでも短母音にほぼ定着しつつある語，また長母音にほぼ定着しつつある語の存在も確認した．長・短母音併存型の語彙は根強く残るものの，次第に限られた数になりつつあるのかもしれない．つまり，母音の長短が意味の違いを決定するスウェーデン語にあっては，このように同一語で長母音・短母音ともに可能な語彙が存在できる許容範囲が狭められつつあることを意味しているのかもしれない．しかし，スウェーデン語全体の語彙数に比べれば，長・短母音併存型はごくわずかの単語にすぎず，しかも周囲からの潜在的な長母音・短母音弁別の圧力にもかかわらず，特に o-母音を持つ語に集中的に存在しているのは興味深い．

o-母音の長・短母音併存型を除く残りの母音に関しては，§7.2 で検討した原則が適用されると考える．すなわち，基本形における〈rt〉の前の母音の長短について，

① スウェーデン語本来の単語であれば短母音（例外: vårta など）．

② 借入語であれば長母音の傾向がある（例外: kvart など）．

ただし，次の2条件が付帯する．

α．多音節語の借入語で第1強勢が第1音節にないときは，第1強勢のある母音は短い．

β．y-，u-，o-母音は短い．

ただ，何をもって借入語と見なすかは判断の分かれるところであるが，一般の語源辞典の解説に準拠するものとし，原則としてその借入時期がそり舌音の形成（Wessén 1968：§166）された新スウェーデン語前期（äldre nysvenska：16世紀）以降としておく．

また，いずれが借入語か本来語かの識別を初級の段階で学習者に要求するのはやや厳しいが，すでにこの段階で多音節語に限って（借入語に特徴的な）強勢の位置などを指摘しながら，この区別を少しづつ認識させてゆくことは今後の学習にも大いに役立つものと確信する．この違いを会得することは，スウェーデン語文法を習得していくうえで，例えば複数語尾の選択，さらには〈o〉表記の発音が［u:］か［o:］か，あるいは［ɷ］か［ɔ］かを区別をするときにも不可欠な知識となってゆく．

さて，§1の子音字の数と母音の長短の問題に戻ると，結論にあるように“長母音＋〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉”に対して，主として“短母音＋〈rs〉，〈rt〉”であることから，子音字の数から母音の長短を判断する原則に従うと，前者が例外であって，後者は原則通りとなる．事実〈r〉を含むその他の子音字連続〈rg〉，〈rk〉，〈rp〉，〈rr〉，〈rv〉の前の母音は常に短い．ところが，“長母音＋〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉”は内容的にはとんど例外なく長母音であるのに対して，“短母音＋〈rs〉，〈rt〉”では，とりわけ〈rt〉の実例で長母音・短母音が混在しているのはまったく逆説的であり，学習者に注意を喚起する必要があろう．合わせて，ここにそり舌音に先行する母音の長短に関して，本稿の調査結果を総まとめしておく．

(1)　〈rd〉

基本形 ⇨ 長母音

〔例外〕短母音：kurd

長・短母音併存：hird，absurd，gard，garde

（hird が使用される分野は歴史関係などに限定されるであろう．kurd と absurd は比較的頻繁に用いられる．gard，garde は必ずしも頻度が低いとは言えない．）

屈折形 ⇨ 例外なく長母音

(2)　〈rn〉

基本形 ⇨ 長母音

〔例外〕短母音：firn，nokturn

長・短母音併存：koturn

（nokturn もやや特殊な語と言えるが，他の2語はさらに特殊であろう．）

屈折形 ⇨ 例外なく長母音

(3)　〈rl〉

基本形 ⇨ 例外なく長母音

屈折形 ⇨ 実例なし

(4) 〈rs〉

基本形 ⇨ 短母音

〔例外〕長母音: orsak, arsel

長・短母音併存: vars

(arsel は卑語で，標準スウェーデン語を学習するかぎり特に必要とは言えない．残りの語はすべて必修単語である．なお，vars は下記の屈折形に挙げられる vars と同一語である(§6.1).)

屈折形 ⇨ 長母音

〔例外〕短母音: törs

長・短母音併存: vars

(törs は重要な助動詞(現在形)である.)

(5) 〈rt〉

基本形 ⇨ 原則として短母音

長母音と長・短母音併存の実例も少なからずある．

長母音の実例:

[ʉ:]: lurt

[o:]: porter, tårta, vårta, årta

[ɑ:]: art, fart, kart, part, smart, snart, partisk, arta, karta, artig, arton, marter

長・短母音併存の実例:

[ɷ]/[u:]: fort 副, hjort, kort 名, lort, ort, port, fjorton, hjortron, kjortel, mortel, skjorta

[a]/[ɑ:]: hart, apart, start, starta

屈折形 ⇨ 長母音

〔例外〕長・短母音併存: absurt, gjort

(absurt は (1) 〈rd〉 における absurd の屈折形であり，gjort はきわめて重要な完了分詞である.)

＊上記の子音字連続において，単一のそり舌音とならずに，[r]+‘歯音’もしくは[r]+‘そり舌音’となる実例(下線の引いてある長・短母音併存の実例がすべて短母音で発音されるときに，このことが言える.):

〈rd〉: kurd, hird, absurd, gard, garde

〈rn〉: firn, nokturn [ʏ], koturn

〈rl〉: 実例なし

〈rs〉: hirs, turs (基本形)

〈rt〉: absurt

これらの実例の先行母音は短母音［ɩ］，［ʏ］，［ɵ］，［a］のいずれかである．

本稿では，〈rd〉，〈rl〉，〈rn〉，〈rs〉，〈rt〉の前の母音の長短の区別に必要な基準として基本形と屈折形，ならびに本来語と借入語の範疇を導入した．前者の屈折形については，学習者は文法を習得していくと同時に理解できるようになるので問題はまずなかろう．もう一つの基準は常に明快に識別できるとは限らないが，本来語と借入語の区別は今後のスウェーデン語学習に肯定的につながる点が多々あることから，この重要性もスウェーデン語教育の視野に入れておく必要があろう．

(1996-09-02)

10. 実例語のリスト

＊実例語中の日本語訳は単なる目安のためであるから，なるべく短い訳語を 1 つ記載した．

＊屈折形は → によりその基本形と語形を示した．

＊屈折形中の略語は以下の通り：現在＝現在形，過去＝過去形，過分＝過去分詞，中性＝中性形（形容詞の中性形は副詞でもあるが，ここでは副詞であることは記載しない），完分＝完了分詞，s-受＝s-受動態，属格＝属格形，形＝形容詞，複数＝複数形，なお単数形は特に指示しない．これらが組み合わされたときは次のようにする．例：過分・複数．

＊同綴りの実例語などで母音の質や長短に違いがあるときは，その母音の発音記号を付した．

---

abort 中絶
absurd 馬鹿げた
absurt → absurd の中性
ackord 出来高払い
aderton (arton の古形) 十八
advers 貨幣などの表側
affär 店
affärs → affär の属格
alert 機敏な
aorta 大動脈
apart 一風変った
ar アール（面積の単位）
arkitektur 建築
arkitekturs → arkitektur の属格
arla 早朝
ars → ar の属格
arsel〔卑語〕尻
arsle〔卑語〕尻
art 種類
arta sig ～のようになる
artig 礼儀正しい
arton (aderton の短縮形) 十八
avers 貨幣などの表側
baner 旗印
baners → baner の属格
bankir 銀行家
bankirs → bankir の属格
bar 軽食堂
bard 吟遊詩人
barmhärtig 慈悲深い
barn 子供
barnmorska 助産婦
barnslig 幼稚な
bars [ɑ:] → bära の過去・s-受
bars [ɑ:] → bar の属格
bastard 庶子
begära 要求する
begärs → begära の現在・s-受
begärt → begära の完分
besvära 面倒をかける
besvärs → besvära の現在・s-受
bevars あらまあ！
biljard ビリヤード
bjärt 派手な
björn 熊
björna 返済を求める
bord テーブル
borda (船などに) 乗り込む
borde → böra の過去
bords → bord の属格
boren 生まれながらの
borna → boren の複数
borste ブラシ
bort [u:] → böra の完分
bort [ɔ] むこうへ
borta むこうに・で

bortre ずっとむこうの
boulevard 広い並木道
bror 兄弟
brors → bror の属格
brorsa〔俗語〕兄弟
brorskap 兄弟の間柄
burna → bära の過分・複数
bård 縁飾り
bära 運ぶ
bärs → bära の現在・s-受
böra 〜すべきである
börd 出生
börda 荷
börs 財布
dag 日
dars (dagars の短縮形) → dag の複数・属格
dekor 装飾
dekors → dekor の属格
diktatur 独裁制
diktaturs → diktatur の属格
direktör 所長
direktörs → direktör の属格
diverse 種々多様の
djur 動物
djurs → djur の属格
dorn シャフト
dynamitard 爆発物を使用する強盗
dyr 高価な
dyrt → dyr の中性
dårskap 愚行
eder あなた（方）の
erlägga 支払う
ernå 達成する
ers (eders の短縮形) → eder の属格
ersätta 補償する
ert (edert の短縮形) → eder の中性
eskort エスコート
expert 専門家
export 輸出
extern 外部の
far 父親
fara (乗り物で) 行く
farlig 危険な
farna → fara の過分・複数
fars [ɑ:] → far の属格
fars [a] 笑劇
farsa〔俗語〕おやじ
fart スピード
farts → fart の属格
figur 姿
figurs → figur の属格
fira 祝う
firn [ɩ] 粒状氷雪
firning [i:] 祝うこと
fjord フィヨルド
fjorton 十四
fjärd 入江
fjärde 第四番目の
flarn 薄手のクッキー
flirt (=flört)
flirta (=flörta)
flärd 虚飾
flört いちゃつき
flörta いちゃつく
fordon 乗り物
fordra 要求する
forn 昔の
fors 急流
forsa 噴出する
forska 研究する
forsla 運搬する
forta（時計などが）進む
forte〔音楽〕フォルテ
fort [ɔ] 砦
fort [ɷ] 速く
frisyr ヘアスタイル
frisyrs → frisyr の属格
frisör 美容師
frisörs → frisör の属格
fyrling 四つ子
fyrtio 四十
färd 旅
färdas 旅をする
färde 〜が進行している
färdig 準備のできた
färla 厳命
färna〔魚〕ローチの一種（コイ科の淡水魚）
färs ひき肉

färsk 新鮮な
födelseort 誕生地
föra 導く
förd → föra の過分
förde → föra の過去
fördel 利点
förlaga 原本
förna 朽ち葉層
förnamn 名
förs → föra の現在・s-受
försommar 初夏
först まず初めに
fört → föra の完分
förtur 優先
förtära 飲食する
förtärs → förtära の現在・s-受
gard 防御姿勢
garde 護衛
garn 編み糸
gepard〔動物〕チータ
gjord → göra の過分
gjorde → göra の過去
gjort → göra の完分
gård 屋敷
gärd しるし
gärda 囲いをする
gärde 囲い（のある牧草地）
gärna 喜んで
gärs〔魚〕スズキ科の淡水魚
göra 行なう
gördel 帯
gördla 帯をつける
görs → göra の現在・s-受
harlekin 道化師
harnesk 鎧
hart ほとんど
harts 樹脂
hasard 賭博
herde 羊飼い
hertig 公爵
hertz ヘルツ
hird〔歴史〕従士団
hirs キビ（黍）
hjord 群れ
hjort〔動物〕鹿
hjortron ホロムイイチゴ
hjärna 脳
hjärta 心
hor 不貞
hord 大群
horn 角（ツノ）
hors → hor の属格
hurdan どんな
hurtig 活発な
hurts（=hutch）キャビネット
hyra 賃借り・賃貸しする
hyrd → hyra の過分
hyrde → hyra の過去
hyrs → hyra の現在・s-受
hyrt → hyra の完分
hår 毛
hård 固い
hårding 強情な人
hårlös 毛のない
hårs → hår の属格
hårstrå（一本の）毛
hårt → hård の中性
härd 暖炉
härda 鍛練する
härlig 素晴らしい
härs; härs och tvärs あちこち
höra 聞こえる
hörd → höra の過分
hörde → höra の過去
hörn 角（かど）
hörna コーナー
hörs → höra の現在・s-受
hörsel 聴覚
hört → höra の完分
hörts → höra の完分・s-受
i morse 今朝
import 輸入
inferno 地獄
inpyrd ～のたちこめた
inspektör 調査官
inspektörs → inspektör の属格
instruktör インストラクター
instruktörs → instruktör の属格
intern 内部の
irländsk アイルランドの

jarl 伯
jord 大地
jorda アースする
jour 業務
jours → jour の属格
järn 鉄
kar 浴槽
karda 梳綿（そめん）機
karl 男
karriär 経歴
karriärs → karriär の属格
kars → kar の属格
kart 未熟の果実
karta 地図
kasern 兵舎
kassör 男性のレジ係
kassörs → kassör の属格
kassörska 女性のレジ係
kavaljer 婦人に付き添うナイト
kavaljers → kavaljer の属格
kavern 洞穴
kjortel スカート
klarna 晴れる
klar 明るい
klart → klar の中性
klo〔動物〕ツメ
klorna → klo の複数・既知形
ko 乳牛
kokard 帽章
kommers 交易
koncern コンツェルン
konjunktur 景気
konjunkturs → konjunktur の属格
konkurs 倒産
konsert コンサート
kontor 事務所
kontors → kontor の属格
kontrovers 論争
kord ひも
korda（円の）弦
korn 穀物
korna → ko の複数・既知形
kors [uː] → ko の複数・属格
kors [ɔ] 十字架
korsa 交差する
korso 車両を連ねた行列
korta 短くする
kort [ɔ] 短い
kort [ɷ] カード
koturn〔古代ギリシア〕編み上げ半長靴
kreatur 牛
kreaturs → kreatur の属格
krig 戦争
krigs → krig の属格
kultur 文化
kulturs → kultur の属格
kurd クルド人
kurir 特使
kurirs → kurir の属格
kurs 講座
kursa 売る
kursor 大学の用務員
kuvert 封筒
kvarn 風車
kvart 四分の一
kvarta 寝る
kvarts → kvart の属格
kår 団体
kårs → kår の属格
käl 凹形
kär 親愛なる
kärl 容器
kärlek 愛
kärna 中核
kärt → kär の中性
köpa 買う
köpt → köpa の完分
köpte → köpa の過去
köra 運転する
körd → köra の過分
körde → köra の過去
körs → köra の現在・s-受
körsbär さくらんぼ
körsel 運搬
kört → köra の完分
körtel 腺
leopard〔動物〕ヒョウ
leverantör 納入（業）者
leverantörs → leverantör の属格
litteratur 文学

litteraturs → litteratur の属格
lord 領主
lort 汚物
lura だます
lurt うさんくさい
lår 腿
lårs → lår の属格
lära 教える
lärd → lära の過分
lärde → lära の過去
lärdom 学識
lärling 徒弟
lärs → lära の現在・s-受
lärt → lära の完分
lördag 土曜日
maj 五月
major 少佐
majors → major の属格
mars 三月
marter 呵責
memoar 回顧録
memoars → memoar の属格
militär 軍人
militärs → militär の属格
miljard 十億
miljonär 百万長者
miljonärs → miljonär の属格
mjärde （魚を捕る）やな
modern 現代的な
modernt → modern の中性
mor 母親
mord 殺人
morgnar → morgon の複数
morgon 朝
morla 鈍痛がする
morna 目覚める
mors [uː] → mor の属格
mors [ɔ]〔俗語〕オス！
morsa〔俗語〕おふくろ
mortel すり鉢
myrten〔植物〕テンニンカ
mård〔動物〕テン
märla U字形のかすがい
märling まとい綱
märs 檣楼
mör 柔らかい
mörda 人殺しをする
mörsare 迫撃砲
mört [œː] → mör の中性
mört [œ]〔魚〕ローチ（コイ科の淡水魚）
namn 名前
natur 自然
naturlig 自然な
naturs → natur の属格
nerz（=nerts）〔動物〕ミンク
nokturn ノクターン
nord 北
nordan 北風
norna〔北欧神話〕運命の女神ノルン
nors〔魚〕キュウリウオ
norsk ノルウェーの
nära 栄養を与える
närd → nära の過分
närde → nära の過去
närs → nära の現在・s-受
närt → nära の完分
offert 価格提示
ord 単語
orda 話す
orden 結社
order 命令
ordna 手配する
orne〔動物〕雄豚
orsak 理由
ort 場所
ortnamn 地名
orts → ort の属格
par ペア
pars → par の属格
part 部分
partisk 片寄った
partner パートナー
perser ペルシア人
persika 桃
persilja パセリ
pervers ひねくれた
pir 桟橋
pirs → pir の属格
pol 極
pola ねんごろにつき合う

polar 極の
polart → polar の中性
porl さらさらという音
porla さらさらと音をたてる
pors〔植物〕セイヨウヤチヤナギ
port 入口の門
porter 黒ビール
porto 郵便料金
professor 教授
professors → professor の属格
pur 全くの
purt → pur の中性
pyra くすぶる
pyrde → pyra の過去
pyrt → pyra の完分
påla 杭を地面に打ち込む
pär 英国貴族
pärla 真珠
pärs [æ:] → pär の属格
pärs [æ] 厳しい試練
pärta →（火を起こすための）そだ
pörte 煙出しのついた小屋
rapport 報告
rar 可愛い
rart → rar の中性
redaktör 編集者
redaktörs → redaktör の属格
regissör 映画監督
regissörs → regissör の属格
rekord 記録
rembours 償還
resurs 資源
retort レトルト
revers 貨幣などの裏側
ror（＝roder）舵
rors → ror の属格; sitta till rors 実権を握っている
rum 部屋
röra 触れる
rörd → röra の過分
rörde → röra の過去
rörs → röra の現在・s-受
rört → röra の完分
sars 絹のサージ
satir 風刺
satirs → satir の属格
skarn ゴミ
skars → skära の過去・s-受
skjorta シャツ
sko 靴
skorna → sko の複数・既知形
skors → sko の複数・属格
skulptur 彫刻
skulpturs → skulptur の属格
skurna → skära の過分・複数
skär 桃色の
skära 切る
skärs → skära の現在・s-受
skärt → skär の中性
skör 壊れやすい
skörd 収穫
skörda 収穫する
skörl 黒電気石
skörna もろくなる
skört [œ:] → skör の中性
skört [œ] 燕尾服の裾
smart 頭のよい
smord → smörja の過分
smorde → smörja の過去
smort → smörja の完分
smärt 細身の
smärta 痛み
smörja 油を塗る
snar 素早い
snarare → snar/snart の比較級
snarast → snar/snart の最上級
snart まもなく
snärt 鞭で打つこと
snärta 鞭で打つ
snöra ひもで結ぶ
snörd → snöra の過分
snörde → snöra の過去
snörs → snöra の現在・s-受
snört → snöra の完分
sol 太陽
sola 太陽光線にあてる
sommar 夏
sommarn → sommar の既知形
sorl つぶやき
sorla つぶやく

sort 種類
spanjor スペイン男性
spanjors → spanjor の属格
spanjorska スペイン女性
spara 節約する
spard → spara の過分
sparde → spara の過去
spars → spara の現在・s-受
sparsam 節約的な
spart → spara の完分
spjärn 足場
spjärna 抵抗する
spord → spörja の過分
sporde → spörja の過去
sport [u:] → spörja の完分
sport [ɔ] スポーツ
sporta スポーツをする
spurt スパート
spurta スパートをかける
spårlöst 跡形もなく
spörja 尋ねる
spörs → spörja の現在・s-受
start スタート
starta スタートする
stjärn 牛・馬の額の白い星
stjärna 星
stjärt 尻
stor 大きい
storlek サイズ
storligen 大いに
stort → stor の中性
strå 麦わら
styra 操縦する
styrd → styra の過分
styrde → styra の過去
styrs → styra の現在・s-受
styrsel 不屈
styrt → styra の完分
störa 邪魔する
störd → störa の過分
störde → störa の過去
störs → störa の現在・s-受
stört [œ:] → störa の完分
stört [œ] 絶対に
störta ぶつかる
surna すっぱくなる
sur すっぱい
surt → sur の中性
svar 答え
svars → svar の属格
svart 黒い
svartna 黒くなる
svordom 罵りの言葉
svurna → svära の過分・複数
svår 困難な
svårt → svår の中性
svära 誓う
svärd 刀
svärta 黒くする
syrsa〔虫〕コオロギ
sårnad 傷
särdeles とりわけ
särla たそがれ
särling 奇人
särställning 特殊な地位
särtryck 抜刷り
tars〔鳥〕すね骨
tenor テノール
tenors → tenor の属格
tern 紙を数えるときの単位
ters〔音楽〕三度音程
tjur〔動物〕雄牛
tjurs → tjur の属格
tjärn 森の中の小さな湖
tordas = töras
torde → töra の過去
tordes → töras の過去
torn 塔
torna 山積する
torsdag 木曜日
torsk〔魚〕タラ
torso トルソ
torts → töras の完分
transport 運輸
travers 横げた
tsar（ロシアの）皇帝
tsars → tsar の属格
tur 幸運
turs [ʉ:] → tur の属格
turs [ɵ]〔北欧神話〕巨人

tursam 運のある
turturduva〔動物〕コキジバト
tvärs; härs och tvärs あちこち
tvärsa 横切る
tvärt きっぱりと
tå 足の指
tårna → tå の複数・既知形
tårta ケーキ
tära むさぼる
tärd やつれた
tärde → tära の過去
tärna 花嫁に付き添う未婚の若い女性
tärning さいころ
tärt → tära の完分 / → tärd の中性
tör 〜かもしれない
töras あえて〜する
törn 打撃
törna 衝突する
törne〔植物〕イバラ
törs → töras の現在
universum 宇宙
urladdning 破裂
urna 壺
ursäkt 謝罪
urtid 太古
vampyr 吸血鬼
vampyrs → vampyr の属格
varda 〜になる
varlig 慎重な
varna 警告する
varning 警告
vars（属格の関係代名詞）
varse 気付いている
varsel 通告
varsla 通告する
varsna 気付く
vart → varda の過去
vart どちらへ
vers 詩
veterinär 獣医
veterinärs → veterinär の属格
vår 春
vår 私たちの
vård 看護
vårda 看護する
vårs → vår〈春〉の属格
vårt → vår〈私たちの〉の中性
vårta イボ
vän 友人
värd 価値ある
värde 価値
värld 世界
värn 防衛
värna 防衛する
värt → värd の中性
vörda あがめる
vört 麦芽汁
yard ヤード（長さの単位）
yra ぐるぐる回る
yrde → yra の過去
yrsel めまい
yrt → yra の完分
år 年
årder 鋤の一種
årligen 毎年
års → år の属格
årta〔鳥〕シマアジ
ärla〔鳥〕セキレイ
ärna 意図する
ärt エンドウ豆
ärta エンドウ豆
äventyr 冒険
äventyrs → äventyr の属格
örla 群がる
örlig 海戦
örlog 海戦
örn〔鳥〕ワシ
örsnibb 耳たぶ
ört ハーブ

Om vokallängd framför konsonantsekvenserna *rd, rl, rn, rs, rt* i nusvenskan

Ikuo Shimizu

Sammanfattning

Vokallängden framför *rd, rn, rl, rs, rt* i tryckstark ställning har hittills inte diskuterats utförligt. I denna uppsats har förf. försökt ta reda på om det finns några regler för vokalkvantitet framför dessa konsonantsekvenser som i princip manifesterar sig i supradentaler. Genom att införa kategorierna 'grundform' och 'böjningsform' kunde förf. dra följande slutsatser. (L= lång vokal, K= kort vokal, '‐' betecknar "finns ej belägg". K〜L innebär att vokalerna är långa i vissa ord och korta i andra, och kan dessutom även inom ett och samma ord växla mellan kort och lång vokal.)

	rd	rn	rl	rs	rt
grundform	L	L	L	K	K〜L
böjningsform	L	L	‐	L	L

Av tabellen ovan framgår följande:

Framför *rd, rn, rl* är vokalen lång både i grundformen och böjningsformen.
Framför *rs* är vokalen kort i grundformen men lång i böjningsformen.
Framför *rt* visar sig vokallängden variera i grundformen men är lång i böjningsformen.

Angående vokallängden framför *rt* i grundformen har förf. funnit följande:
Bland [u:]/[ɷ]-typen, dvs. ord där det förekommer växling mellan kort och lång vokal inom ett och samma ord (t ex *gjort*), börjar en del ord föredra kort vokal: *fort* (adv), *kort* (adv), *lort*, *port* osv.

Längden på de övriga vokalerna kan förklaras så här;

① Vokallängden hos svenska arvord är kort; *hjärta*, *svart*, *ört* osv. (undantag: *vårta* och *kart*).

② Vokallängden hos lånord är ofta lång: *fart*, *porter*, *tårta* osv.

I följande två fall är emellertid vokallängden hos lånord kort:

α . lånord som inte har huvudtryck på första stavelsen; *alert*, *expert* osv.
β . lånord som har *y-*, *u-*, *o*-vokal; *myrten*, *spurt*, *porto* osv.

Att inte alla lånord följer ② beror på att de har möjlighet att behålla sin ursprungliga vokalkvantitet vid inlåningen.

参考文献

（外国文献の発行地は特記のないかぎり Stockholm）

Allén, Sture. 1986. *Svensk ordbok.* Esselte Studium AB.

———. 1991. *Basordlista med bilder.* Almqvist & Wiksell Förlag.

Allén, Sture, Mats Eeg-Olofsson, Rolf Gavare & Christian Sjögreen. 1981. *Svensk baklängesordbok.* Esselte Studium AB.

Allén, Sture & Christian Sjögreen. 1993. *Norstedts svenska baklängesordbok.* Norstedts Förlag.

Collinder, Björn. 1974. *Svensk språklära.* Lund: CWK Gleerup.

Dansk Sprognævn (udg.). 1977. *Efternavne i Norden med udtaleangivelse.* København: Nordisk Forlag A.S.

Elert, Claes-Christian. 1970. *Ljud och ord i svenskan.* Almqvist & Wiksell Förlag.

———. 1995. *Allmän och svensk fonetik.* 7: uppl. Norstedts Förlag.

Forskningscentralen för de inhemska språken (utg.). 1994. *Svensk uttalsord-lista.* Helsingfors: Tryckericentralen.

Garlén, Claes. 1988. *Svenskans fonologi.* Lund: Studentlitteratur.

Holmes, Philip & Gunilla Serin. 1990. *Colloquial Swedish.* London and New York: Routledge.

Liljestrand, Birger. 1975. *Så bildas orden.* Lund: Studentlitteratur.

Lindblad, Per. 1996. "Sje och tje i kontrastiv belysning", *PLS Lärar-PM.* Nr 26/96, 1-3. Invandrartidningen.

Loman, Bengt. 1967. "Synpunkter på svenskans fonotaktiska struktur", *Arkiv för nordisk filologi.* Vol. 82, 1-100. Lund: C. W. K. Gleerup.

Lyttkens, I. A. & F. A. Wulff. 1889. *Svensk uttals-ordbok.* Lund: C. W. K. Gleerups Förlag.

———. 1917. *Ordskatt och ljudförråd i svenska språket.* Lund: C. W. K. Gleerups Förlag.

Malmberg, Bertil. 1971. *Svensk fonetik.* Lund: Gleerups.

Malmström, Sten & Iréne Györki. 1980. *Bonniers svenska ordbok.* Albert Bonniers Förlag AB.

間瀬英夫. 1995.「O. Engstrand によるスウェーデン語のIPA表記について」,『視聴覚外国語教育研究』第18号, 13-30. 大阪外国語大学.

Molde, Bertil & Elias Wessén. 1971. *Svensk språklära för danskar.* 4: uppl. København: Rosenkilde og Bagger.

Morris, William (ed.). 1973. *The Heritage Illustrated Dictionary of the English Language.* Boston: American Heritage Publishing Co., Inc.

Noreen, Adolf. 1903. *Vårt språk. Nysvensk grammatik i utförlig framställning.* Första bandet. Lund: C. W. K. Gleerups Förlag.

SAOL = Svenska Akademien (utg.). 1986. *Svenska Akademiens ordlista över svenska språket.* 11: uppl. Norstedts Förlag.

清水育男 1995. 『現代スウェーデン語発音入門』. 大阪外国語大学.
(= Shimizu, Ikuo. 1995. *Inledning till svenskt uttal.* Osaka University of Foreign Studies.)

Skolverket (utg.). 1992. *Svenska ord – med uttal och förklaringar.* 2: uppl. Norstedts Förlag.

菅原邦城・Claes Garlén 編. 1987. 『スウェーデン語基礎1500語』. 東京: 大学書林.
(= Sugawara, Kunishiro & Claes Garlén. 1987. *1500 viktiga svenska ord.* Tokyo: Daigakushorin.)

Svenska språknämnden (utg.). 1965. *Uttalsordlista.* 3: uppl. Esselte Studium.

Svenska språknämnden & Svenska Akademien (utg.). 1988. *Svensk skolordlista.* Norstedts Förlag.

Söderbergh, Ragnhild. 1968. *Svensk ordbildning.* Läromedelsförlagen.

Thorell, Olof. 1981. *Svensk ordbildningslära.* Esselte Studium AB.

Wessén, Elias. 1968. *Svensk språkhistoria. I. Ljudlära och ordböjningslära.* 8: uppl. Almqvist & Wiksell.

———. 1973. *Våra ord, deras uttal och ursprung.* Andra, tillökade upplagan. Läromedelsförlagen/Språkförlaget.